
運命物語

運乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命物語

【Zコード】

Z3383Z

【作者名】

運乃

【あらすじ】

ある年の冬、柵橋市たなばしでは放火殺人のニュースが騒ぎになっていた。家一つをまるごと焼くほどの火が町では数日置きに見られ、火の町と言われるほどに連続していた。同時に町ではもう一つの事件、連續殺人でも騒いでいた。犯人が捕まらない二つの事件が平行して起きる柵橋市。市民の不安が強まる中で再び放火事件が起きた。和井かずい正吾しょうごの家が燃やされ、そして生き残ったのは正吾のみだった。生き残った正吾は引き取り手もなく、しばらくの間施設に送られることになるが、次々に不可解な現象に巻き込まれていく……。悲しみの

運命が回りだす現代ファンタジー

プロローグ「運命からあなたへの手紙」（前書き）

不定期更新になりますが、週末や連休の更新が多くなると思います。なるべくないようにしてますが、思いつきなどで書いてしまうためご都合主義になってしまふ所もあるかと思いますが、そこはぜひ辛口な評価をしてやってください。

初めてなのでアドバイスとか感想とかもらえたなら嬉しいです。あと、遠慮なく辛口コメントしてやってください。お願いします。

プロローグ「運命からあなたへの手紙」

あなたは自分の運命が分かつたらどうしますか？

幸せに暮らしている未来だとしたらそのまま歩いていきますか、それとも決まっている幸せは嫌だとそれすらも変えてしましますか？

不幸な未来だとしたら幸せな未来に変えてしまいますか？

自分は幸せでも周りの人間が不幸になる未来へ変えますか？

もし自分の運命が誰かに操られていると分かつたら、その運命を変えていこうとしますか？

もしそれで運命を変えられたとして、その先に死ぬことが分かつているとしても、あなたは自分の運命を変えますか？

運命に逆らい、死にも逆らい、未来を掴むための地獄へと。あなたは進めますか？

世界から憎まれようとも、未来へ……

b Y 運乃

1話・始まりの火種

暗く深い青色にでも塗られたような空に星が瞬く。

あまりの寒さに、少女は肩をすくめて「コートを着直した。冬に入り寒風が町を駆け抜けることが多くなり、コートやジャケットなくして夜の外は歩けなくなっていた。

寒い。少女の呴いた声で外の寒さが明らかになる。言葉と一緒に出た白い息が、ふわっと、軽やかに夜の闇へと消えていった。

少女が扉に広告のチラシが張られた家を曲がる。曲がると街路灯に照らされた住宅街の道が少女を出迎えた。少女はそのまましばらく住宅街の中を歩き、門が備えられた白い建物に入った。門の所に『ひばり児童養護施設』と表札がある白くほどほどに広い建物だ。

少女が透明のガラスになつている扉を開けて中に入る。扉の上についている鈴が鳴った。中は物寂しい外見とは違つた、柔らかく温かみのある匂いに満ちていた。

「ただいま」

扉を閉めた少女の声に一人の女性が奥から飛ぶように走ってきた。

「お帰り未来ちゃん。大丈夫だった？」

いかにも心配している表情と声色の、髪の毛を揃えて結わいた30代の女性が未来を心配そうに見つめる。

それに反して汚れた茶色い革靴を脱ぎながら未来が聞き返した。

「大丈夫つて、何かあつたの？」

「また放火魔が出たみたいなのよ。今テレビでやってて、」

「そ」

玄関で騒ぎ立てる女性の話を流して未来は歩き始めた。

「未来ちゃん」

「（）飯は食べてきたからいらぬ。あとその話もいいから」

女性にそう言つて後の言葉を無視する。触れられたくないと言わんばかりに女性を突き放し、未来は一際明るい部屋を目指した。そんな未来の後ろで女性が寂しそうな顔をして溜息をついた。いつも未来はこうなのだ。ここに職員とは最低限の会話をするだけであり話をしない。構われることに慣れていないのか、ただたんに嫌いだと思っているのかの区別もつかず、職員全員を困らせる問題児になつっていた。

廊下を歩きながら未来は女性が職員専用の部屋に入つていぐのを横目で微かに見ると、目的の部屋へと視線を移した。様々な絵や注意事項が貼られている壁がある部屋だ。ここに皆が遊んだり話しをしたりする場所もある。ここに一日一回でも顔を見せないと心配される体調チェックの場所でもあつた。

そこから聞こえてくる声に未来は眉を寄せた。

テレビも置いてある部屋だが明らかに話している。しかも、未来が聞きたくはない声のような気がした。

その部屋の入り口に立ち、未来は中に向かつて明るい声で言つた。

「皆ただいま」

「未来おねえちゃんお帰り！」

「お帰りー」

暖かい部屋の中にいる七人の子供の声が一齊に未来を向いた。未来が子供達にもう一度ただいまと返す。と、同時に未来は部屋の中で、子供達の前に座る黒いコート姿の男を睨むような目つきで見た。

睨まれている「一ト姿の男が振り返る。

「未来ちゃんお帰り」

「あんたなんで来たの？」

せつかくの笑顔を向けた男に対し、未来が愛想の欠片もない返事をした。未来の目付が磨かれた刃物のように鋭さを増す。そんな未来に物怖じもせず男は未来に話しかけた。

「近くまで寄つたから、様子を見にきたんだよ」

「じゃあ、用は済んだでしょ。早く帰つて」

「そんなこと言わなくともいいじゃないか」

「……私部屋に戻つてるから、皆も早めに寝てね」

しょんぼりとする男を無視して、未来は男の傍にいる子供達にだけ言った。

部屋を離れようとする未来に、子供達が口々に黙々とこねる。

「お姉ちゃんも一緒にお話をうつよ」

「私未来お姉ちゃんと寝る」

「ほらほら未来ちゃん、皆もいっしょに寝てね」

未来が開いた手をあげて横に振つた。

「じゃあね、おやすみ」

男ではなく子供達におやすみを言つて、未来は部屋から足早に遠ざかる。部屋から遠ざかりながら、寄せた眉間も離していく。

未来は男の事が嫌いなのだ。話すことすら嫌で、近寄るのはもつてのほかだった。

別に男の人が苦手というわけではない。部屋にいた男、その人間だけが未来にとつては受け入れられないのだ。男の存在 자체、未来にとつては許せないともいえるほどに嫌っていた。

帰宅早々になんで、と未来が機嫌を損ねて自分の部屋に戻った。

自室のドアを開けて中に入る。煌々とついている明かりに未来はしじうがないと言葉に出す代わりに溜息をついた。

部屋を出る時は消灯が原則だった。誰もいないのに点けているのはもつたいたいからだ。しかし、それとは別に一番の理由があるこということを未来は知っていた。

経費削減。なるべく節約したいというのが職員の本音だ。お金がないのだこここの施設は。

それをここにいる小さい子達はよくわかつていない。お金の話などは小さい子達にはまだ関係ない。

だからこそ、節約する部分を“もつたいたい”で教えるのが未来の役目だった。それすらも未来には面倒に感じられるのにだ。

それでも教え方が悪かったと反省しつつ、未来は傘のよつな電灯から垂れ下がる紐を引っ張った。パッと明かりが消えて部屋が暗くなる。ほとんど何も見えない。

しかし、部屋は三人が入つて何かできる程度の広さ。決して広くはないため、場所と感覚で覚えれば暗くても移動はできた。

暗中の部屋で未来は感覚を頼りにベッドへと近寄った。そして自分がベッドに入り、未来は自分を覆うように布団を被つた。被ると陽に当たつたような温かな匂いが布団からした。

布団を干した証拠に少しだけ満足して、目を瞑りさつき聞いたことを頭に浮かべる。

連續放火魔。最近町で噂になり、実際に起きている凶悪事件だ。

この一ヶ月以内で五つの家が燃えている。そして今日も起きたらし

いという。それで六つ目。嫌な事件だ。

眠ろうとする未来の頭に外からカンカンカンと騒がしい音が響いた。町の中ではほぼ連日といつてもいいくらいに鳴るサイレンの音だ。

毎夜聞きなれた音に未来は耳を塞いだ。自分の嫌いな男がいるのに、それでいてうるさいサイレンの音。

未来の怒りの火種が燃り始めていた。

赤い粉が雪のように地面に落ちた。コンクリートに落ちた火が分厚い靴に踏みつぶされた。

火の粉が放たれる炎に向かつて、勢よく水が噴き出される。見るからに重厚そうな服装をしている人達が、長いホースを持つて一斉に炎へと水を掛けていた。

水を掛けられてもさらに火が強まる炎が、不気味に煌めいて搖れる。まるで効かないとも言っているかのような笑みにも思えた。そんな炎から離れたところ、炎に立ち向かう消防員達の後ろには、人々が炎の行方を不安そうに眺めていた。

見守られる炎に、見守る人々。そんなたくさんの人ごみをかき分け、一人の少年が炎の近くへと走った。しかし、一瞬にして警察二人にその行く手を阻まれた。一人に抑えられた少年が暴れまわり叫んだ。

「どいてくれっ！ 親父もおふくろも華もばあちゃんもじいちゃんも、皆が中にあるんだ」

「待ちなさい。君が行つてもこの炎じゃ助けられないだろ？消防隊が今全力で消火と救助をしてるから、絶対に助けるからここで待つてるんだ」

制止する警察官の声にも負けず少年が尚も暴れまわる。

「親父、お袋！まだ中に、皆が、」「おい、君大丈夫か！？」
「どうしたんだ！？」

二人の警察官に凭れるようにして少年がダラリと崩れ落ちた。二人に抱きかかえられる少年の目が虚ろに炎を睨みつけた。
消してやる。そして、家族を助けるんだ。その思いだけで少年が警察官に抱えられた中で立ち上がった。支えられる手をどこで少年が一歩踏み出した直後、大勢の目の前で炎がその息吹を上げた。
大爆発でもしたかのような音を立てて炎の勢いが増した。
真っ赤に燃え上がる炎。その憎々しい光景を目に焼き付けて少年は瞼を閉じた。

「お、おい。救急隊この子を運んでくれ」

遠ざかる意識の中で、少年の頭にサイレンの音が馬鹿みたいに大きく聞こえる。体が浮く微かな感触と共に、飛び交う色んな話し声の中で一つだけ鮮明な声が耳に入ってきた。

「そうして少年は病院に送られたのでした。チャンチャン

少年にだけ聞こえた声が救急車のサイレンで搔き消される。燃え盛る炎を後ろに救急車が走り出した。サイレンの音が、少年が戻らないとでも言つてゐるかのように遠ざかつていった。

2話・火事の翌日

棚橋市の中でも一番大きな病院、東棚沢病院。ひがしはなざわびょういん昔からある病院でほとんど全ての科があり地域でも有名な所だった。その三階にあるとある病室。その附近にいた全員が朝早くから驚かされた。一声によつて。

「嘘だ」

少年の大声。廊下にも響き渡るほど怒鳴り声がとある病室から轟いた。その声に病室にいた全員がそちらを迷惑そうに見て、病室の付近にいた全員が異様な目つきを病室に当てた。

異様な目つきで見られたその病室は三百四号室。そして迷惑そうに見られた本人は、そこ窓際にあるベッドで、枕を腰掛にして座っていた。

大声を出した少年は白い掛け布団の上に目線を落とした。その前の前ではいい歳をした医師が頃垂れる少年を見下ろしていた。

静かになつた少年に医師が今言つた事の事実を述べる。

「本当なんだよ。昨日の火事で、」

「嘘だ。あれは夢だつた」

医師が少年にもう一度夢でないことを伝えた。

「夢じやない。君の家は火事にあつた。そして、君以外全員、……」

少年がしばらく何も言わずに座つていると、医師が慰めるよつて言った。

「まだ受け入れられないかもしねないが少しずつでもいい。けどこれは、」

「生きてんだろ。皆……」

視線を下げたまま呟いた少年に、医師も悲しげな表情で言葉を返した。

「昨日の今日だ。受け入れられないのも当然かもしねない。話した私が悪かった」

「…………犯人は」

少年が同じ声、同じ姿勢で聞いた。

「犯人は、誰だか分かつてるんですか」

「それは分からぬままだ。警察が必死になつて捜査してる。すぐ捕まるよ」

医師の言葉に少年が何度も頷いた。

それを見て医師は少年に対する懸念を口にした。

「憎む気持ちは分からぬもないけど、復讐してやろうと思つてゐるならやめたほうがいい。復讐したとしても君のためにもならないし、家族も浮かばれない。それは、分かるね？」

無言のまま少年が続けて頷いた。あえて顔を見せないようくついている気が医師はした。

「後でまた来るから、それまで大人しくしてるように」

去りうとする医師に少年が咳いた。

「華は来年中学生になるつて喜んでたんだ。ばあちゃんもじいちゃんもやつと落ち着いたからつて来年の旅行楽しみにしてたんだ。なのに……」

吐くように咳いた少年に、医師が何も言わず病室から出て行った。医師も周りの患者も声を掛けることができなかつた。家族が連續放火の犠牲になつたのは、少年で四人目だつた。だからこそ、どう声を掛けていいか分からなくなつていた。

周りから同情の眼差しを向けられる、少年の目からぼつと涙が零れた。落ちた涙が少年の足に掛かる白い布団をほのかに濡らせた。

朝十時の起きたての体で、未来はカーキ系のダウンジャケットのチャックを上げた。

体は温かいのに、頭が寒い。そんな体の矛盾に可笑しさを感じる。同時に、耐えられない寒さに身震いを起こした。

今日は九回目、十回目のこの冬一番の冷え込みなのだ。だから、言つまでもなくものすごく寒い。が、未来はこの冬一番の寒さという言ひ方を可笑しいと思っている。

天気予報ではこの冬一番といつのを秋の終わりからずっと言つてゐる。しかし、それを寒い日が訪れることに毎回改めて言つていると、一体いつが寒いのか分らない。そもそもこの冬一番というか

らややこしくなるんだ、と未来は天気予報との予報士に、いつも心の中で文句を垂れていた。

寒さで嫌々起されたて不機嫌なまま、手提げのバッグを手にぶら下げた。これからすぐに出かける予定だつた。

しかし、その前にと未来は遊び場である部屋に立ち寄つた。いつも皆に一声かけるのが日課だからだ。

未来が部屋に入った途端、待っていたかのような声と近寄つくる足音が出迎えた。

「未来お姉ちゃんおはよう！」

「お姉ちゃん今日も寝坊だよ」

未来の前で子供達の声が幾重にも重なる。ここにいる子供たちの相手をよくすることがあるためか、未来は子供達には人気者だつた。田の前でじちやじちやに飛び交う子供達のおはようを聞いて、未来は一瞬不審に思つた。いつもとは違つた声調。それにどこか皆の雰囲気が暗い。明るい声だけど、表情がいつもとは違つたのだ。

それを気に掛けつつ未来は笑顔で返事をした。

「おはよう。それどじめんね。今日も出かけるから皆と遊べないんだ」

謝る未来にそれぞれ浮かない顔をした。やはり何かあつたのかなと思う未来に、一人の男の子が言つた。明るくて元気だけどすぐに泣いてしまう男の子で、皆からコウくんと呼ばれている子だ。

「お姉ちゃん大変なんだよ」「どうしたの？」

聞き返す未来に子供達が口々に言つた。

「火事があつたんだよ」

「ホウカマが出たんだって」

「お家がゴオツつて燃えてたの」

「それで消防車から水がバアーッって」

四方八方からまたも飛び交う声に、未来が今度は頷いて受けた。そして皆の言葉を受け止めつつ、悟られないほどの小さな溜息をついた。

先週もこんな風に騒いでいた気が未来はしたのだ。しかも同じような騒ぎかたでだ。けれど、たつた一つだけ違うことがあった。それは明らかに怖がっている表情が濃くなっているということだった。しかし、それも当然のことだった。

連続している放火は昨日起きたので八件目。そのうち全員死んでいるのが四件、生存者がいるのが四件だった。

その週に一回は起きる火事。それを警察が関連があると発表してからすぐに、町中に連続放火という言葉が、まるで火のよう広がつていった。

そのせいか、連續放火が騒がれた二ヶ月前から、町では消化訓練や火の取り扱いにかなりうるさくなつた。うるさいを通り越して神経質なくらいに。

しかし、そうなつたのも連續放火のせいではなかつた。何よりその火事以外の小火だけなら一日に一回は必ずあるのだ。

そのためか火事のニュースが毎日のようにテレビで流れ、ほぼ連日でサイレンの音が町を駆け巡つていた。

火事のニュースやサイレンの音で大人が不安になるのだから、子供が怖がらないはずがなかつた。

口々に火事の話をする子供達に未来が相槌を打つたり、怖いと言ふ子へニコリと微笑んだ。

「大丈夫。お巡りさんがすぐに悪い人を捕まえてくれるから。そしたらまた町が静かになるよ」

本当、と聞いてきた女の子に未来は母親のような笑みで「コクリと頷いた。

それでも子供達の怖がっている表情に変わりがないことを、未来は確かに感じ取った。

もう一度大丈夫と優しく、今度は力強く言つて、出かけてくるからねと付け足し部屋の外に出た。

大丈夫といいつつも、出かけるたびにここが放火されないことをだけを未来は心配していた。帰つたときに家がなかつたら、と出かける前に嫌な想像が頭をよぎるのだ。そんな想像すらしたくもないのに。

少しばかり暗い表情で廊下を玄関へ向かって歩いていると、

「未来ちゃん」

そう呼びかけられて未来は振り向いた。

未来を呼んだのは二十代のメガネを掛けた女性。今年から新しく入った職員で、人当たりの悪い未来には何度も泣くような思いをさせられている。それにも関わらず根気よく話しかけてくるこの女性には未来も少しだけ感心していた。

ほとんどの職員が、刺々しい未来に話しかけることの意味を感じなくなっている。それを未来自身感じているためか、今では小話かテキトーにしか返事をしていない。そんな自分に毎日飽きずに話し

かけてくるこの女性を、未来は好奇的な人物として少しだけ気に入っていた。悪い話さえもつてこなければ。

呼びかけられた直後、未来は玄関へ続く廊下へと向き直り歩き始めた。話の内容に想像がついた。

高校生の自分。そして平日の十時。掛かってくる所は一つだった。しかも、掛けてくる人物も分かっていた。

「今学校から電話があつて。今日は、」

「出かけるからまた今度」

「少しだけでもいいから、顔見せてあげたりとか」

女性の言葉を聞き流したかのように未来は玄関でブーツを履いた。随分前から履いている毛がついてふわふわしている茶色のブーツだ。もちろん学校の革靴ではない。

履き終えて玄関の扉に触れた。そこで未来はもう一度呼びかけられて女性に答えた。怒りを込めた言葉で。

「先月は行つたでしょ。出かけるつて言つたから、それじゃあ

「未来ちゃん！」

女性の言葉が未来の閉めた扉の音で遮られた。頃垂れる女性の姿に見向きもせず、冬晴れの言葉が似つかわしい空の下、未来は学校ではない場所へと歩き出した。

時計の時刻が十一時と十七分に変わった。

十一月の日差しが少しばかり汚れた白い地面に反射して光る。

病院の屋上とは別に設けられたテラス。空中庭園を模したようなその場所で、患者や医師など病院に関わっている人間が日向ぼっこをしていた。天然の暖房に冷やかながら澄んでいる空気。それらを少しでも感じたいという人がこのテラスに集まっているのだった。

その中に一目で落ち込んでいる雰囲気の少年改め、和井正吾の姿もあった。

「和井くん、そろそろ病室に戻りましょう」

「はい……」

正吾は看護師に言われて、重たそうな腰をやつと椅子から上げた。立ち上がった正吾がテラスをノロノロと歩く。一気に歳でもとつかのような鈍い動きで。

正吾が迷ったように看護師へ問い合わせた。

「あの、中に入ったら病室まで一人で行つていいですか?」

看護師が躊躇つて考え込む。医師から少年のことをあまり一人にしないようにいわれていたのだ。それに付け加えて病室まで送るのも自分の役目。けれど、誰かに付きつ切りでいられるのも嫌だうと、看護師が答えを迷っていた。

少し長い返答待ちに、正吾も一人で行けないなら行けないでいいと思っていた。

看護師が正吾へと少しだけ首を傾げた。

「一人で大丈夫?」

「はい」

「それならいいんだけど、ちゃんと病室にいてね

「はい……」

意外な返事に正吾は今できる最高の笑顔で頷いた。といつても、微笑にもならない笑顔だ。

そうして中に入り、テラスからまっすぐの清潔にされた廊下の丁字路まで正吾は看護師と歩いた。丁字路で看護師が右の廊下へ、正吾は左へと向かう。

その前に看護師がもう一度正吾に言つた。

「あと少ししたら昼食になるから、それまで病室で待つてね」

その言葉に正吾はまたできるだけの笑顔で答えた。

正吾が左にある自分の病室へと向かう。首を前に傾けて自分の影と磨かれて傷のついているタイルを見つめた。

今日で何度も心配されているか分からない。その中にはいらない気遣いも含まれていた。新聞やニュースができるだけ避けるようにされたり、話題に出さないような気遣い、そして自殺しないかといつ心配までされていた。そんな気遣いに対して、事件のことを告げてくれた医師の方がよっぽどないと、正吾が思うほどだった。

そうやって気遣われるのも、心配されるのも全てが忌々しい記憶のせいだった。

夜半に起きた火事。誰かによつて家に火をつけられて家族が死んだのだ。自分以外の五人が。

それを聞いてからさつきまで、正吾は少したりとも信じなかつた。信じる氣にもならなかつた。が、緊急だと押し掛けた警察の事情聴取で正吾は自分が見た物が正夢だつたことを知つた。いや、無理やりに知らされたのだ。家族が確かに死んだことを聴取で何度も言わ

れたのだから。

警察に火がつけられた時のことを聞かれて、正吾は正直に遊びに出かけていたと答えた。火事の時正吾は友達とゲームセンターで遊んでいた。自分の家が燃えているとも知らずに。そもそも分かっていれば遊んでなどいなかつた。そう後悔してもしきれない中で、いろいろと聞かれ、正吾は自分を責められているようにも感じた。悪いのは自分だったのかもしれない。

そんなことを思つてゐるうちに、正吾は足元にある自分の影が憎く思えてきた。目の前にある影が犯人のようにさえ思える。そんな錯覚が正吾を襲つていた。本当に火をつけたのは自分ではないかと。自分が、犯人が、自分が、犯人が、やつた。

頭の中で響く声に握り拳を固めた瞬間、一つの足音が正吾の後ろでキュッと足音を鳴らして止まつた。

「ねえ、ちょっとといい」

病院の廊下に突然女性の声が発せられる。が、それに気づかず正吾は自分の影だけを見続けて歩く。

「ねえ、俯いてるあんた。ちょっとといい」

怒ったような声によつやく正吾は頭を上げた。そして自分の病室に目を向けた。まだ少しばかり遠くにある。自分の戻る場所だ。

「そこの暗そうなあんたに言つてるんだけど」

イラついている声によつやく正吾は声の方向へと振り返つた。今呼ばれた気がして。

正吾が振り返ると、そこには眉間に皺を作つた眼光鋭い少女が立

つていた。

口を一文字にしていて、ムスッとしているようにも見える。が、笑えば可愛いこと間違いなしの顔の持ち主だった。顔から肩に覗く髪は艶やかな黒で、肩にかかるほどだ。スタイルも良くアイドルだつたとしても可笑しくはなかつた。

そんな少女が正吾に鋭い視線をぶつけていた。こちらが何か悪いことでもしたかのような、向こうが喧嘩を売っているような視線。一瞬で怖さを覚える少女に正吾は聞いた。

「なんだよ……」

聞き返した正吾に、少女は飛ばしてた眼つきも眉間の皺も、溜め息を吐いて消し去つた。

「君気を付けた方がいいよ」

「なんで」

意味の解らない言葉に更なる恐怖を正吾は感じた。誰ともしれない少女に気を付けると言われて、警戒しない人間がいるはずがなかつた。

少女が何ともなしに、正吾をぞつとさせることを言つた。

「君から嫌な臭いがする。火で何かを焦がしたような焦げくさい臭い。それに火をつけた時のモワツとした臭いもある。だから気をつけた方がいいよ」

「……」

不気味なことをいう少女のせいで正吾は床を見た。火の臭い。そ

れに気を付けた方がいい。馬鹿みたいだつた。既に手遅れだと言い返そうとして、しかし、言えなかつた。火事が起きたことを咄嗟に指されて、まだ反論できる余裕などなかつたのだ。

黙る正吾より先に少女が口を開いた。

「何かあつたの？」

正吾が言い返すこともせず沈黙を続けた。

立ち尽くしている正吾に少女は迷つたふうに言つた。

「……何かあつたなら十分に気を付けた方がいいよ。こういう臭いつて続くから。引き留めてごめんね。気を付けた方がいいことだけ伝えたかつただけだから。それじゃあ」

少女が勝手気ままに一しきり忠告すると、本当に少しの微笑と手を振つて去つていった。

去つていった少女の姿を見ることもなく、看護師に呼びかけられるまで正吾はその場で立ち尽くしていた。

日にあたる自分の影になぜ自分じやなかつたのかと。なぜ燃やされたのが自分の家だつたのかと。犯人を同じ目に合わせてやりたい。そう思いながら、自分の影を見つめていた。

3話・未来の頭痛機嫌

ガキンガキン。ガンガンガン。
採掘をしているかのような、製鉄所のような金属を叩く音が響く。
頭の中で。

「未来お姉ちゃん、大変だよ。今日ここに」

「ユウくん、しーつ。お姉ちゃん今頭痛いんだから向こうに行つてて

小さな声で叱る女の子の声とユウくんが扉を閉める音。それが未来の頭の中ではいつもより大きく聞こえた。

その原因がまた未来の頭の中で反響した。割れるほどでもない頭痛。それが起きた未来を朝から何度も襲っていた。
頭痛はするが風邪の症状がない。熱すらない。ただ今日は調子が悪いだけなのだ。

鳴り止まない頭痛の音に、未来の苛立ちが募っていく。それでもまだ起きた頃よりはマシになっているのだった。

未来の眠るベッドのまん前。左右相対するように置かれたベッド。その上に座る女の子、優奈^{ゆな}が未だに布団に丸まっている未来に声を掛けた。

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「……寝てれば大丈夫だから。それよりユウくんは何を言いに来たの?」

優奈が未来のぶつかりぼうな言い方に言葉を選ぶ。

長くここにいる優奈にとって、未来は一番頼りになる姉のような存在だった。その反面、機嫌が悪いときは一番居たくない相手でも

あつた。そのため体調や機嫌の悪い時は優奈もあまり未来に話しかけないようにしている。変な災難を呼びたくないのだ。

「えっと、今日ここに新しい子が来るっていう話。未来お姉ちゃん昨日早く寝ちゃつたから、聞いてなかつたでしょ。だから知らせにきたんだと思うんだけど。今じゃなくてもいいのにね」

未来からの無言の返答。優奈が最大限の未来の不機嫌さを知った。無言のそだよね、が壁際のベッドから聞こえてきたような気がしたのだ。

それに未来が知らせに来たユウくんを恨んだ。変などばっちりが自分に来るかもしれない。

優奈がそう思つた時、意外な言葉が壁を向いて丸まつているであらう未来から飛んできたのだ。

「今日?」

「うん。男の子が一人。十一月中旬の今つてビリヨーなときに入つてくるよね」

またも無言の返事が優奈に向けられた。

そして、言いたくなかったことが未来自身の口から出たことになる。優奈が驚きの声をあげることになる。

「それって私が紹介するの。ここを?」

その瞬間、優奈が驚いて肩を跳ね上げた。体調の悪そうな声と鋭く刺すような声。それが優奈の驚怖を湧き上がらせた。そして、布団で見えない目がこちらを睨んでるような気までしたのだった。曖昧な返事で、しかし未来の言つたことを否定することなく優奈が頷いた。

「でも、できなかつたら皆でするし」

「いい。適当に説明するだけで終わらせるから」

「じゃあ、逸見さんへみに伝えていい?」

「うん」

未来の額きに優奈がベッドから降りて部屋を出た。

逸見さんはここに長くいる職員の人で、軽いパー・マのかかつたシヨートヘアーが似合う四十年代の女性だ。こないだも火事があつた時、帰つた未来のことを心配して軽くあしらわれた。が、当人一人はどちらもあまり気にしていない。昔からあることだつたからだ。

優奈が出て行つた後の部屋で残る未来は重たい頭を体ごと持ち上げた。再び痛みが頭を刺激する。まるで、常時なる目覚まし時計が頭の中に入つてゐるみたいな感覚。非常に寝覚めが悪かつた。

どうにか起き上がつた未来が勉強机の上有るカレンダーに目をやつた。

今日は十一月の十八日で土曜日。あと十三日で今年も終わりといふ日。そんな今日の曜日に未来は頃垂れた。

いつも行く予定の場所が今日は開いていない。そこが開いていたら面倒な案内役を引き受けなくともよかつたのだ。そもそも、新しくこの施設に入つてくる子が今日でなければよかつたのだ。頭が痛い今日でなければ。

イライラと溜息をつきたくなるような思いが混沌と渦巻く中、ノックする音に未来は返事をした。

部屋の中に入ってきたのは女性の職員、逸見百合香へみゆりかだった。皆からは逸見さんや逸見おばちゃんと呼ばれている。四十年代前半でおばちゃんと呼ばれるこの女性を未来は可愛そだと思っていた。見た目は若く見えるのだ。不思議なくらいに。

入ってきた逸見が扉を閉めながら未来に尋ねる。

「寝てるって聞いたけど大丈夫?」

「見ての通り何とか生きてる」

「死ぬほどの頭痛だつたの」

「要らない話があつて死にそうになつたけどね」

「冗談と用件を交えて二人が話をする。話しながら、逸見が未来とは向かい合う様に優奈のベッドに座った。

座る時に一度腰を浮かせるようにして座る。それが逸見の癖であることを未来はかなり前から知っている。一度だけなぜそう座るのか聞いたことがあった。その理由がつまらない理由、と口に出すほどつまらなかつたことを未来は思い出した。

「また」

「いいじやない。癖だもの。それより、月曜日に火事があつたでしょ?」

聞かれた途端に未来はピンときた。優奈の言葉を思い出し、不機嫌な目つきを逸見に向けた。

「今日入つてくるんでしょ?」

「あら、聞いてたの?なら早いわね」

逸見が必要な部分だけ言う。未来のこの口つきと態度には慣れているのだ。

「あなたと同じ高校生で男の子。棚橋高校にいつてるから顔くらい見たことあるんじやない」

「いちいちその辺の顔なんて覚えてないから、多分知らない。向こ

「うがひうかはしらないけど」

「う、と逸見が相槌を打つて話を進める。未来が会話で嫌いなのが無駄話だからだ。」

「部屋は男子のほうね。他のことはあなたが説明して
「適当でいいでしょ。あとは暮らしてるうちにわかるんだし」
「うん、それでいい。ただ必要最低限のことだけは説明してあげて。
あと、あなたから何かあつたら説明していいから。そこは任せる」

未来がわかるほど溜息で逸見に答えた。面倒くさいこと。
しかし、それも気にせず逸見は続ける。「一番重要なことを。

「でも、事件のことで深く傷ついてるから優しくしてあげてね」

逸見の言葉に未来がより一層田を鋭くさせてしまつた。

「同情じゆうひん」と.
「未来つ」
「冗談よ。分かつてゐる」

未来が微笑を浮かべて肩をすくませながら逸見へ返した。怒ることを分かつて言つたので、未来は気にしていなかつた。

「それで今日のこつくるの？」
「もうすぐ来るわよ」

本当に急な話だと未来が逸見とその少年に内心で舌打ちした。いつも急にしか話をしない逸見はともかく、これから来る少年は急すぎた。今さつきまで寝ていたため、まだパジャマ姿なのだ。

頭痛のイタツケと少年の転居に未来の不機嫌さがさりて増す。

「じゃあ着替える」

その意味を察して逸見がベッドから立ち上がった。

「はいはい。着替えたら遊び場について。その子が来たら呼ぶから
「来なくてもいいんだけど」

部屋から出ようとしている逸見に未来が憎々しい口調で返事をした。
そんな未来に逸見がしかめつ面を向けた。

「未来。ちゃんとよ？」

「まじまじこね

まつたくと一言置いて逸見が部屋から出て行った。頭痛もあって
か今日の未来は頗る機嫌が悪かった。

未来が適当に着替えて、遊び場へ向かった。いつも朝に立ち寄る
部屋だ。

「おはよう
と、一言だけ言つ。おはようが返つてくるのを確認して未来はすぐ
に部屋を出た。

今日部屋にいる子は全部で三人。優奈とコウくん、そしてコウく
んと同じ年で七歳になつたばかりのマキちゃんだけだ。あとは全員
遊びに行つてゐるか何かだった。

静かな施設。とてもいい雰囲気なのにこれを台無しにするイベン

トが未来を待っていた。

案内などの説明は未来にとつてはあまりやりたくないことだった。だが、今いる三人に任せると騒がしくなることは想像しなくてもわかつた。

静かにしてほしくても騒ぐのだから、新しく誰かが来るというイベントで大人しくしているほうが奇跡だといえた。

逸見が未来自身に任せたのも単に他にやることがあるからだ。なければ自分でやつたはずだつた。未来の予想では。

未来が施設の中を少しだけ歩く。少しばかり引いた頭痛のおかげで、頭が軽くなつた気がしていた。

暇つぶしに歩いた後、未来が玄関の廊下の壁に寄りかかった。早く終わらせたい。そして、今日は寝てみたい。

その思いだけで玄関で待つことを未来は決めた。遊び場からどうせここに来る。それを考えたらここで待つても同じだと考えたのだ。

そして逸見の言葉と自分の思いを心の中に浮かべた。

これから来るのは火事で家をなくした少年。ニュースで見た限りその少年に家族は一人もいない。全員死亡したらしかつた。そもそもいたらここにはまずこない。孤児院兼自動養護施設などに来るはずがない。

何よりどちらかといふと来ないほうがよかつた。少年のためにも。けれど、家族がいな上に、身寄りがないなら一時的でも仕方ない。

それが少年の、と思いかけて未来は気づいた。

立つていたのだ。透明なガラスの入つたドアを開けて、広い玄関スペースに一人。職員一人と見知らぬ少年が。手荷物を持つたまま少年が軽く頭を下げた。

「はじめて。俺、和井正吾。かずいしょうよろしくな」

笑顔ではきはきと挨拶する同い年ぐらいの少年、和井正吾。
その少年を一日見て、未来は口元を少しだけ緩ませた。
案外、平気じゃない。そう感じて。

「こじが遊び場。遊んだりお菓子食べたりぼーっとしてもいい場所。何してようと勝手だから皆大体ここにいるか自分の部屋にいるかね」

「他の部屋は違うのか？」

「同じなのは各自の部屋だけ。後は風呂場とか台所だからできないかな。まあそこで過ごしたいなら別に誰も文句は言わないだろうけど」

未来の説明に少年が唸るように頷いた。さつきから説明が大雑把過ぎてよくわからないのだ。

「未来お姉ちゃん」

呼びかけられた未来が中にいる三人を手招きした。正吾と未来の前に三人が集まると、未来は優奈に指先を向けた。

「こじの子は優奈。今中学一年生で私の次に年長。分かんない」とあつたらできれば優奈に聞いて

「またそつやつてお姉ちゃん私に押し付ける」

優奈の言葉を聞き流して未来は自己紹介を促した。説教されると逃げるのも未来の悪い所だった。

「これからよろしくお願いします。眞井優奈です」
「よろしく。俺は和井正吾。えつと」

「私と同じ年だから」

未来の一言で三人が声をあげた。

「やったね。皆お兄ちゃんだよ」

はしゃぐ三人を放つて未来は紹介を続ける。

「このちがコウくん、このちがマキちゃん。一人とも同じ年で七歳。
今年小学校に入つたばかり」

「正吾お兄ちゃんよろしくね」

「お兄ちゃんどこのお部屋?」

「もう決まつてるの?」

「コウくん達のところにいるからね」

四人の会話に正吾が置き去りにされる。

そのことに気付いて未来がコウくんとマキちゃんの二人に手をかざした。

「また後で。あと部屋に行つてくるだけだから、すぐに戻つてくる
から話すならその時にね」

未来の言葉に満足しないと言わんばかりの一人が軽く頬を膨ら
ませた。

「僕も行く」

「私も」

「ダメって。お姉ちゃん真合悪いんだから。未来お姉ちゃん私代
わるよ?」

「いい。一人のこと見てて」

そうして正吾と未来が遊び場から廊下に出て自室の方へと向かう。

正吾が今の話を聞いて未来に尋ねた。具合が悪そうには見えなかつたからだ。

「具合悪いのか？」

心配そうな表情で聞く正吾に未来があっさりと答える。

「心配ない。ちょっと頭痛がするだけだから」

本当にあっさりと答えた未来に正吾が聞き直した。

「風邪なのか？」

「じゃないみたい。片頭痛かなんかだと思うけど。そのうち治るから心配しなくてもいいから。よくあるのよね。嫌な予感のする時つて」

未来の意外な言葉に正吾が関心を示した声を出した。

「へえ。じゃあ頭に感知器でもついてんじゃないのか？」

「だとしたら取り外したい。予感がするたびに痛くなられても困るし」

未来の笑みに正吾もようやく肩の力が抜けた気がした。玄関から先、二人で歩いて説明や会話をしても未来は一度も笑っていなかつたのだ。それが遊び場での会話で微笑を見せ、今初めて一人の会話で笑つたのだった。

正吾がよかつたと安堵の表情を浮かべた。

その後、未来が立ち止り正吾も倣つて足を止めた。

何かと未来を見た正吾は、目にした顔が前を睨んでいることに気

付いた。それも怒つてゐるのが分かるほどに眉を寄せて。

正吾が前に目をやると、部屋の扉が点々と並ぶそこに、スーツ姿にコートを羽織つた三十代ぐらいの男が歩いて向かってきていた。それに気づき、そして明らかに少女がその男を睨みつけているのがわかり不思議な顔を浮かべた。

その横の未来が怒氣を声に表して男へ放つた。

「何か用でもあるの？」

男が一人の前に立つ。すると、未来が更に嫌な顔を男に向かた。そんな未来へと男が苦笑する。

「いや、ちょっと立ち寄つただけだよ」

「いつも何の用があるの。変態」

「変態つて失礼だなあ」

「いつも顔見せる人なんていないから。誰か攫つ子でも探しに来てるのかなって思つて」

未来に対して男もしかめつ面をした。半ば犯罪者扱いされているのは遺憾に感じ、憤りすら感じられた。

「そんな犯罪じみたことするわけないだろ?」

「じゃあ、何の用よ?」

「だから、元気にしてるかなつて。それよりその子新しく入つてきたのかな?」

男に言われて未来が隣へと目を移した。

途端に正吾がその口から出た言葉に驚かされる。

「……あと優奈に聞いて。私出てくから」

「え、出でくつて？」

聞き返した正吾に対して未来がクルリと反対を向きながら言った。

「出かけるつてこと。じゃあね」
「ちよつ、」

言いかける正吾の事を無視して未来が進む。男と正吾とは反対の方向へと。

「おい、具合悪いんじやないのか」「治つた！」

怒鳴るような声をあげて未来が一人の前から早足で去つていった。残された二人はそれをぽかんと呆れて見送る形になつた。夏場の天気みたく晴天から豪雨に様変わりした少女に正吾は呆れていた。会つてからまだ三十分ぐらい。それだけの時間でここまで喜怒を見せる少女は初めてだつた。

呆然として佇む正吾に笑いを込めた声が後ろから聞こえた。

「嫌われてるんだよなあ」

苦笑しながら頭を搔き、見たまんまに困つたような男の方へ正吾は振り返つた。

見た目は完全に三十代を超えたオッサン。だが、どことなく若いように見える。三十代手前と言つても可笑しくはなかつた。剃り残したような顎鬚が似合つていなければ。

複雑な気持ちで男を見ていた正吾に男は興味津々な目を向けた。

「君は今日からここに？」

領き名前を名乗った正吾に男はあつと一聲上げた。

「忘れてたよ。俺の名前未来ちゃんから聞いた?」

首を横にした正吾にならと男が言った。

「俺、七五三」

「七五三?」

聞き返す正吾に男は自慢でもするかのような口調で喋る。

「珍しい名前だろ。全部数字で、七〇五三でなじみつて読むんだよ」

七五三とこつ男に正吾はへえと関心のある声を出した。

「三十二年間同じ苗字にあつたことがないのが自慢なんだよな」

そう言つた七五三とこつ男の歳がこじでわかり領いた。

三十二歳。正吾はその見た田に妥当だなと思つた。四十なら若いと思つたが、三十ならそれぐらいかとしか思わなかつた。

正吾が歳を聞いて興味を失くした瞬間、再び男に惹きつけられた。

「それより君さ火事のことでいい話聞きたいと思わないかい?」

その言葉に正吾は目を見開いた。いい話と言つたこの男が何か知つてゐる。自分の家族を奪つたあの火事のことを。

正吾の顔が微妙に変化したのを感じてか、男が微笑を湛えた眼差しで正吾の目を見た。

「もしかして、君事件の？」

「はい……何か知ってるんですか。犯人の事とか」

正吾が聞くその姿勢に男は一度宙へ目を逸らした。まるで、突つかかるかのような聞き方だったからだ。

「聞いた話だけだけど、それでもいいなら話すよ」

それでいいと頷いた正吾に男も首を縦に軽く振った。

「それじゃ自室で話そう。そつちのほうが君もいいだろ？」

「その方がいいんですけど、まだ場所がどこだか。ユウツテ子の部屋なのは聞いたんですけど」

「ユウくんの所か。分かった」

男が続けて正吾に着いてくるように言った。男に従つて正吾が後をついて行く。そして一人で納得した男に正吾は問いかけた。

施設内に詳しいことが気にかかつたのだ。

「ここにはずっと来てるんですか？」

「まあね。知り合いが昔ここで世話をになつてからずっと来てるよ。その知り合いはもう死んだけど、彼がここにきていろいろ援助してやつてほしいって、最後に言われてね。俺もこの事はほっとけないと思って、それ以来かな」

それから部屋に着くまで一人が少しばかり話した。男がサラリーマンであることや、本人が悲しむほどに結婚できないことなど。ほとんどが男の話だったが。

そうして目的の部屋にたどり着き一人が中に入った。

部屋の中に入ると真正面に窓があり、その脇には机が一つ置かれていた。そして壁際にはベッドが一つあった。一段ベッドと一段のみのベッドの一種類だ。

それなりに片付いている部屋の中に正吾が入り、改めて今日からここで暮らすことを感じた。朝はここで起きて全員で食事をして、その後でそれぞれが自分の時間を過ごす。学校に行ったり遊びに行つたり。そうして自分たちの部屋に戻り眠る。そんな生活がしばらく続くのだ。

「ドア閉めて。話すからさ。荷物は適当に置いといいいと思つよ

言われて正吾は我に返つた。正吾が入口近くにバッグを置き言われた通りドアを閉めた。

男が窓の左、入口から見て左側の勉強机の椅子に腰をおろした。正吾はどこに座つたらいいか分からぬまま、とりあえず一段ベッドに座つた。

「俺が知つてることだけは話すからさ。君が求める物じゃないことかもしれないけど」

正吾はそれでもいいと首を縦に振つた。

男は胸ポケットに手を伸ばし、煙草を取り出そうとして止めた。子供部屋はもちろん禁煙だからだ。窓の手椅子の背凭れにかけて男は正吾の方を見ながら言った。

「俺が知つてるのはさ、犯人像と今日火事があるつてことなんだよね」

驚きの声を漏らす正吾に男は冷静な口調で続ける。

「誰も知らないけど、犯人はどうも中学生らしいんだ」

「中学……」

「ああ。連続放火の犯人は中学生。だから君の家族を奪った犯人も同一だと思うよ。他の小火は知らないけど」

正吾はガックリと肩を落とし、握り拳を爪の跡が残るほどに作つた。

「最初は遊び半分だつたんだろうけど、スリルとか楽しさを求めた結果大火事になつたってどこじゃないか。今のは俺の予想だけど」

そんなと声を震わせた正吾に男は黙りこんだ。俯く正吾の顔が怒りで染まっているのが見えたからだつた。

正吾がバッと顔を上げた。怒鳴る声が飛ぶ。

「そんなものの為に、俺の家族は死んだのかよ！」

怒りを露にする正吾とは正反対に落ち着いた口調で正吾に言葉を返す。

「俺は犯人の動機なんて知らないよ。知りたかつたら今日確かめたらいいんじゃないかな」

「どういうことだよ」

冷めない怒りをぶつけてくる正吾に男は答えた。

「今日の夜に放火するつて話を聞いたんだよ。場所までは分からなしけど確実だ。俺のことを信じるなら今日の夜街を歩いてみたらいい。本当に確実だから」

信じられないような事を言つ男。それに正吾は目線を自分の足元

に戻した。

今日の夜火事がある。そんな予感がするのではなくそれを人から聞いたという男を正吾は信じられなかつた。信じられるはずがなかつた。

「どうしたいかは君が決めるとして、俺からの情報はこれだけだ。後は何も知らないからさ」

そう言つと男は椅子から立ち上がつた。正吾は一瞬見ただけですぐに視線を戻した。

下を向く正吾に男は一言付け足した。

「分かつてゐとは思つけど、捕まえるのはいい。でも復讐してやろうとか同じ田にあわせてやるつて思つるのは間違いだよ」

正吾の肩を軽く叩き男は部屋を出て行つた。

男が出て行つた後も正吾はそこから動きもせず、自分の足元に目を向けていた。

火事の話が本当なのかどうかと、男の言葉により信用と不信の間に揺らされながら。

5話・運命との出会い

闇夜が蠢いているかのような空に煌々と輝く月が浮かんでいる。住宅街の街灯の光を消せば月が導きの光みたく見える月夜の綺麗な夜。一人歩く少年の足元が街灯から注がれる光で照らされた。

ダウソングジャケットのポケットに手を突っ込んで歩く少年こと和井正吾。防寒対策を施した正吾が寒空の下を歩く目的は一つだった。自分の家族を火事で奪った中学生を探すためだ。だが、正吾は既に諦めていた。

一時間以上住宅街をうろついているにも関わらず、怪しい人物はいなかつたのだ。会うのは家に帰るサラリーマンや家族連れ。その他色々とすれ違ひ見かけるなどしても、火事とは全く無縁そうな人間しかいなかつた。それどころか当てもなくふらついている自分が不審者みたくなっていることに気付き止めようと思つていたのだ。

寒さに震える正吾はデマの根っこである人物を恨んで舌打ちをした。

昼間にこれから先暮らすことになつた施設であつた初見の男、七五三^{ごみ}。それに今夜火事があると言われ、七五三の話を聞いたのだ。そして話を聞いた最に今夜火事が起こるかもしれないと言われ、犯人に近づけるかもしれない外に出たのだ。

犯人に家に火をつけた理由を聞ける。その犯人を捕まえる。そう意気込んだ結果、七五三の言葉を半信半疑^{ななな}だつた正吾の期待を大いに裏切る結果になつた。案の定犯人はいなかつたのだ。

人の噂話に自分の勘。そつそつ当たるはずがない物を信じただけ

だと、正吾は自分に言い聞かせ、施設のある方へと足先を向けた。馬鹿だと自分に悪態をつきながら。

悔しさ半分怒り半分。何の解消にもならない混濁した気持ちを抱えたまま、正吾は住宅街の石壁を左に曲がった。

その瞬間、正吾は首を傾げるような光景を目にする。

一軒家が連續するこの住宅街。正吾がいるまっすぐな道が続くその途中で、薄明かりに照らされた人影がある家の前でしゃがんでいたのだ。家の前の人影が動く。

不気味に思いながら帰り道だから仕方ないと正吾が近づこうとして足を止めた。怪しい人物の目の前でボツと火花が散ったのだ。

同時にその人物の顔が浮かびあがり男だと正吾にはわかった。

一軒家。しゃがんでいる怪しい人間。ボツという音に火花。それらが一瞬で正吾の頭にあることを連想させ、次に正吾はその人物に向かつて叫んでいた。

「お前何してんだ！」

正吾の声にびっくりしたのか不審者である男の手から何かが落ち、カラリという音がした。落とした物を慌てて拾つた男が正吾の方を向き立ち上がる。そして正吾の方へと歩きだした。

不気味に近づいてきた男の顔や背格好に正吾は驚いた。

そこにいた人物は確かに男だった。だが老いを感じさせるものはなく、どちらかというとかなり若い、中学生ぐらいの少年だったのだ。

少年とわかると正吾は一瞬で誰だか悟つた。

犯人はどうも中学生らしいんだ。七五三の言葉を正吾は思い返した。連續放火の犯人が目の前にいる。それだけで正吾は自分の体が強張るのを感じた。

正吾に怯えられた少年は鋭く怪しげなその目つきを正吾に向けてなぜか笑っていた。

気味の悪い少年に正吾は同じことを、今度は最大の警戒心をもつて聞き返した。

「お前何しようとしてたんだよ」

「見ればわかるだろ。火をつけようとしてたんだ」

何とも思つてない。そう言わんばかりの言葉。そして真顔で自分を見るその姿に、正吾は底知れない恐怖を突きつけられたような気がした。

少年の言葉に正吾は自分の胸にある憎悪を確認するよひに口を開いた。

「お前が連續放火の」

「そうだよ。今日で九件目なんだから邪魔するなよ。それともお前も一緒に燃えるか？」

正吾の顔に驚きと恐怖が満ちる。

普通に考えれば用もないのにライターの火をつけたまま人に近づくことなどしない。ましてや、一緒に燃えるかなど聞く人間はいない。何より自分で放火魔と認めた。その発言から真面じやない、本当に放火魔なのだと知った。

その瞬間正吾の頭に二つの選択肢が生まれた。この場から今すぐにでも離れること。もつ一つはこの少年をどうにかして捕まえることだ。

だが、どちらを選んだとしてもかなりのリスクがあつた。真面じやない少年がどうでるか分からぬといいう最悪のリスクが。

少しばかり少年との距離があるその間で決める。そう決めた正吾

は少年にある事を問い合わせようとした。自分の家族を奪つた理由を放火するその理由を。

目の前の不敵に笑う少年に正吾は問いかけるために口を開いた。

その瞬間、

「なんで放火なんてするんだ。怯える少年Aはそう叫んだ」

突如聞こえた謎の声に、二人が辺りを見回した。

聞こえたのは少女のような声。二人がいる道にはそれらしき人物はない。それどころか人っ子一人いない。

「二人がどこだどこだと声を頼りに辺りを探す」

再び聞こえた声に一人がある家の方を向いた。その家は一人がいる所から左というすぐそばだ。そして、家の塀から上を見て二人の顔が驚きに満ちた。

二階建ての家の屋根。斜面になつていてる屋根の縁。軒先の所で今にも滑り落ちそうな格好の少女が悠然と一人を見下ろして座つていたのだ。夜空に澄みきつて美しく映える月の姿を背に従え、手には小さなノートのような物を持ち、足をぶらりと投げ出して。突如現れたその少女に正吾は疑問を投げつけた。

「お前誰だよ。こいつの仲間か」

屋根についた左手を口元に運び少女はクスリと笑つて正吾の問いに答える。

「私は運乃。^{うんの} それとそいつとは仲間じゃないわ。そんな馬鹿みたいな事する奴私知らないもの。ねえそうでしょ？」 放火魔の少年B

問い合わせられた犯人の少年は正吾と同じことを聞き返した。

「お前一体誰だよ」

「同じ」と言わせないで。私の名前は運乃」

聞いてる意味が違うと正吾が言つと、運乃是口を一文字に結んだ。答える気がない。そう言つてゐるかのような少女に正吾はもう一度問い合わせようとしたその瞬間、口が開かず叫ぶような声を発した。口の違和感に正吾が戸惑つて慌てる。

運乃是左手に持つていたペンを指差す様に正吾に向けた。

「駄目じゃない。同じこと三度も言わずにはセリフ通り喋らないと。“運命”に決められた通りにね。じゃないとあなた、この状況で死ぬことになるわ」

「なんだと……！？」

「よかつたじゃない今度は喋れて」

その瞬間運乃是持つていたノートにペンを走らせた。凄い勢いで走り書きでもしてゐるかのようだ。

正吾が怪しげな少女から視線を放火魔の少年に一旦戻した。途端に正吾は体を真横に投げるような形を取つた。

「ぐつ」

正吾の体の横を、手にナイフを持った少年が通過した。避けられた少年はふらつき、正吾は地面に体を倒す。倒れた痛みを堪える正吾に少年が近づく。

「お前死ねよ。その後は屋根にいるお前だからな」

少年が運乃と正吾に手に持つナイフを向けながら言つと、正吾の

方へと向いた。

足元の近くにいる血走った眼でナイフを握る少年。それに立ち上がりて向かつて行ける力が正吾からは抜けていた。どうにかして立ち上がらないと分かっていても体に力が入らなかつたのだ。

恐れる正吾の目にナイフを持つ少年並みの衝撃が飛び込んできた。少年の後ろにある家。その屋根で笑みを浮かべる少女の姿が正吾の目に確かに映つたのだ。走り書きをしていたのも止めてノートからペンを放している少女の姿がそこにあつた。

それを不可思議に思う正吾の前で少年が動く。まるで少年みたく笑っているかのように光で銀色に輝くナイフが少年の体に寄せられる。

刺される。正吾はそう思ひきゅうと目をつむつた。

「おやすみ」

微かに咳く少女の声が正吾の耳に届いた。

それでも正吾は目をつむり続ける。殺される。刺されて死ぬ。

そう何度も思つて正吾は再び目を開けた。ナイフが自分に刺さるまでが遅すぎるのだ。

不思議に思ひ恐る恐る目を開けた正吾は、目の前の光景に目を丸くした。

いない。

今さつき自分の前にいた放火魔の少年が跡形もなく消え去つたのだ。そのせいか、少年の影みたく見えていた少女がはっきりと、月を背にして見えていた。

何が起こったのかわからず正吾は右左と首を動かした。さつきまで

と変わらない住宅街。

逃げた、咄嗟に正吾はそう思った。だが、少女の言葉でそれが違うことを知られる。

「少年は忽然とその姿を消し、死を覚悟した少年は放火魔が消えていたことに一刻の安堵を得ると立ち上がり、自分の帰る場所である施設へと戻つていくのでした」

田を見張る正吾に運乃是優しい笑みを湛えながら言った。

「さあ立つて、和井正吾」

「なんで、どういうことだよ……なんで俺の名前知つてんだ。それにはさつきのあいつは？」

動搖する正吾を下に見ながら運乃がノートにペンを置いた。手元を見ずに行かを書く少女に正吾は再び同じような事を聞く。

「あいつはどこに行つたんだよ。お前知つてんだろ」

「運命」

「は？」

運乃が正吾を見ずに答える。

「今日あいつは用事があつてここに来れなかつた。だからいない。そういう“運命”だつたのよ。あなたが聞いた話はただの噂話。見たことも全て幻」

悪魔が微笑んでいるかのような表情で淡々と語る少女に、正吾は少年以上の恐怖を感じた。

少女の言つ限り少年はここにはいなかつたことになる。何かわからぬ用事で。しかし、正吾の覚えでは確かにここにいたのだ。家に火を点けようとしたライターを持ち、阻止した自分を殺そうとした少年は間違いなくここにいたのだ。そして自分が感じた恐怖も確かだつた。

意味不明なことを言つ少女に正吾は反論する。

「待てよ。あいつはやつかりこじに、」

震える声をあげた正吾の声が突然消えた。しかし、声が消えたのではなかつた。さつきは閉じられた口も、パニックで硬直した顔も、戦き震える体もなくなつていた。住宅街の街灯に照らされる道には誰も立つていない。

正吾自体が姿を消していたのだ。

物静かになる住宅街の一角。そこで唯一家の屋根に残る少女運乃は、持つていたノートをパタリと閉じた。

「突然の事に動搖に体まで揺らされた少年は、突如住宅街の中から消えたのでした。そこにいた痕跡すら残りもせずに……さてと」

そう呟いた運乃が屋根の上から周辺を見回した。

少し向こうの道では男女が仲よさげに歩き、別の方では人影がふらふらと歩いていた。それらに運乃是溜息を零すと、今この場にいた少年を思い返す。

「和井正吾……あんなだったかな。どこかで辿る運命間違えたつけ？ねえアトロボス」

運乃が閉じたノートを再び開いた。途端にノートが風に吹かれた
かのようなすごい勢いでめくれ、止まつたページに運乃是クスッと
笑つた。

和井正吾の名前が書かれ、全身が映つた写真の貼つてある文の詰
まつたそのページで、運乃是笑んだ。

あなたは少年Bを殺すの？

心の中でそう呴いて。

6話・夜明けの一服1

暗い無表情の顔から蒼白に変わつていく空に吐く息が白い。それもそうかと七五三は思つた。

人差し指と中指に挟んだメンソール系のタバコのせいだ。だが、実際外が寒いせいでも白くなつていてるのもあり、どちらのせいで息が白くなつていてるのかは不明瞭。なぜなら空気が低温だとしたら俺の体温とタバコは高温だ。今空気にとっては、三十六度七分の俺と俺以上に高温な七百度以上のタバコは物凄く暑苦しい一人でしかないはずだ。

と、そんなつまらないことを考えながら七五三は再び口に手を運んだ。明け方の静寂に包まれた空気に煙の混じつた息を吐く。薄暗い町並みと灰色の煙が重なる。

明け方の町を七五三がビルの屋上から眺めていると後ろでガチャリと音がした。

「先輩こんな寒いところで帰る前に一服つか？」

七五三は手すりに腕と体をかけたまま顔だけを男に向けた。そこにはきつちりとした黒のスーツを着て、どこの会社でも使つていそうな青い紐のついた社員証をぶらさげた若い男がいた。今年入社したばかりの二十三歳の新入社員だ。苗字は袴田^{はかまだ}。七五三のことを先輩と呼んでいるが、そう呼ばせるように七五三が最初に言ったのだ。

袴田という男が七五三に近寄る。その手には缶コーヒーが一つあり、一つを七五三に渡した。

少しばかり熱めの微糖のコーヒー。いつも通りだと七五三はボ

ケットから百円を取り出した。それを男に返すと再び町の方へと振り返り、手すりに腕をぶら下げた。

男も同じよじにして手すりに手を置いた。そして溜息を吐き一口だけ缶コーヒーを啜る。

「終わったのか？」

「終わりましたよ。でも、これで遠野先輩が納得するかどうか」

「上司の顔色気にしてまで仕事するな。あんな奴のことなんかほつとけ」

「やう言えるのは先輩が部長だからじゃないですか」

七五三が苦笑いを返した。

そりや氣を遣つたりはする。新人社員が上司に文句言つて得することなんてほとんどない。だが、それも今年で終わる。辞めるのだ、遠野は。

それを顔には出さず七五三は笑つた。

「だから先輩から遠野先輩に言つてくださいよ。僕のせいにしないよつこつて」

愚痴をこぼす男に七五三は苦笑交じりに答えた。

「考え方」

「考えないでくださいよ……先輩が言つ頃には遠野先輩いなくなっちゃうんですから」

「なり、それまでの辛抱だ。疫病神が去るまでのな」

「そんな神様いらないんだけどなあ」

男の言葉に笑つて七五三はタバコを口にくわえた。何も知らないのだ、この男は。あと少し、あとほんの少しだ。そう思いながらタ

バ」「をふかす。

考へてることをなるべく表には出さず七五三は町並みを眺め続ける。

白くなつてこゝ空に對して、町の明かりがついているも暗がりの中にはいの町並み。何百回以上も見て慣れ親しんだ景色に七五三は何度でも惹きつけられていた。

「先輩好きですねえ。この景色」

ほんやつとしていた七五三に男が言った。

「ああ。明け方の空を眺めるのはいいぞ。一日が始まるのを見ながら物思いに耽る」

「やうなんすかねえ……僕にはわかんないです」

首を傾げた男に七五三は笑い返した。

「まあお前がこの景色に耽るようになつたら終わりだよ
「それってどうこいつ意味ですか?」

七五三は黙つた。ここつにまこれ以上話す必要がない。話している話じやないと考えて止めた。その代りとして七五三は適当に答える。

「まあ人生色々つてやつだ」

「なんですかそれ」

「それよりも、昨日は鳴らなかつたな」

「まか
誤魔化すよつて七五三は別の話へと変えた。

「え、ああ……確かに鳴らなかつたですね。先輩の勘外れましたね」

一ヤリと笑つた男に七五三は納得のいかない顔で街並みを眺めた。昨日は確實に火事が起ころははずだつたのだ。しかし、仕事をしていた間に聞こえたサイレンの音は一つもなかつた。

それを変に思いつつ七五三はそのことを口にした。

「確かにと思つたんだけどな。なんで外れたんだか…………でもまあ人の家に火つけるような奴の考えなんてわかりたくないな」

「同感です。なんで火なんてつけるんですかね?」

「さあな。それが面白いんじやないのか」

「放火が?」

「ああ。でも俺は放火魔じやないからな、分かんないよ」

言葉と共に七五三はタバコを足元に落とした。火を足で消して携帯灰皿の中に吸い殻をいれる。

分かつていたら苦労しない。そう言いかけた口にコーヒーを流し込んだ。そうして中身のない空になつた缶を手で遊ぶようにぶらぶらとさせる。

休憩も終えた。朝日は遠い。そして寒い。

それらが七五三を会社から出させめる気分にさせた。もう一つのことも。

「そろそろ帰るか」

「ですね」

「コーヒーを飲みほした男と共に七五三は扉の方へと向かう。

疲れを出すように溜息を零す男の横で七五三はあることを考へていた。昨日起きなかつた放火のことだ。

昨日の夜確實に火事は起きる予定だつた。なのにもかかわらず起

きなかつた。そのことに七五三は納得できなかつた。

連續放火の犯人は中学生。何年生かは知らないが性別は男で間違なかつた。中学校には週四日通つていて部活は写真部。学校に行つてない後の一日は町の探索。土日はどこかで適当に時間を潰している。家族は四人。両親と弟がいて三人とは不仲。原因は一度少年が不登校になつたこととそれに付随する喧嘩。

それらから七五三は放火魔の少年の、簡単な動機について分かつていた。

よく聞く言葉むしゃくしゃしたからや、写真部にいるということもあつて火事の写真が撮りたかったなどだ。その上でなぜ昨日の夜に放火しなかつたのかを考えて、七五三はあることを思いついた。一日時間をあけてまでやりたいことがあつたのではないか。それこそ騒ぎになつても可笑しくないほどのことをやるために準備を。

そう考えながら七五三は男と話しながらもなるべく急いで会社を出た。

会社から出た所で男と別れる。

「袴田今日はゆつくり休めよ」

「先輩もー。それじゃお疲れ様でした」

七五三が男に背を向け、しばらく歩きふつと笑いケータイを手にした。電話帳に登録してある谷中といつ名前の人間を呼び出す。

「俺だ。放火魔の件なんだが分かつたことがある。今日デカいことをしでかすつもりかもしれないから、今からそいつの所に行け」

電話越しの返事に七五三は頷いた。

「証拠なんて後でどうにでもなる。先に身柄確保だ。いいな？」

返事が返り電話が終わると七五三は続けてもう一つへと電話する。

「里崎俺だ」

出た男の口調に七五三は呆れた。

「お前酔ってるのか？ 飲みにはいかない。つていうよりも店が閉まってる。俺のせいにするな。時間のせいだ。時間？ まだ五時半過ぎだ。それよりも谷部昇たにべのほるつて奴の周りに怪しい奴が現れるかもしない。警察はいい、ほっとけ。ただし、南部未来なんべみらいと和井正吾かずいじょうごも対象には入れるな。それ以外の誰かが問題ある接触をしたら始末しろ。もちろん行方不明としてだ。頼むぞ」

七五三が電話を切る。一息つき背伸びと共に自分へ力を入れる。仕事だと自分へ言い聞かせて、七五三は目的の場所へと向かつた。黒いコートの襟を正して。

7話・放火事件への誘い

頭の上で鳴る何かで正吾は目を覚ました。快闊なその言葉で。

「あんたいつまで寝てんの？ 朝^{しょ}」はん過ぎてるんだけど。日曜と土曜、あと休みの日だけは皆で食べる決まりって言わなかつたつけ？」

目を覚ました正吾は人の姿に目線を上へと向けた。ほっそりとした小顔に少しばかりきつい眼。その眼つきはきれ長で大きいせいかもしれない。これで微笑んだり笑つたりすれば可愛いのに、と、思つたところで正吾は飛び上がり叫んだ。壁に背中をぶつけつつ。

「お前なんでここにいんだよ！ いつてえ……」

寝起き草々に背中と頭を激しくぶつけた正吾に少女は呆れつつも答える。

「今言つたけど、朝食が終わつたつて言つたの。休みの日だけは皆で集まつて食べる。それがここの中まりなの。朝いなければ具合が悪いとかわかるつて意味でも集まるつて決まつてるんだから。ここに来たばかりつてのも分かるけどそれぐらい守つて。食べた後ひきこもううが出てくつて言おうが勝手だから」

「あ、ああ…………わかった」

まくしたてるかの如く喋つた少女に押されて正吾は頷いた。しかし、本音は起きた途端に訳も分からずいきなり怒られた。それが淡水と喋つた少女に対しての正吾の感想だった。

叱られたからか目が覚めたからか正吾はある事に気付いた。自分

が昨日ひばり児童養護施設に入つたことに。様々な理由を持つた子供達がいる場所で、一時的な保護が主だつたりもしていると、聞かされた場所だ。

正午が自分のいる場所を改めて確認すると、少女になぜ男子部屋にいるのかを理由を尋ねた。

「で、なんでここにいるんだ？」

聞かれた未来は不思議そうな顔をした。壁に馬鹿みたいに頭を打つて可笑しくなったのか、自分の居る場所が分かつていない。そう思い未来は溜息を吐いた。

「昨日自分でここに来たんでしょう？」

「俺じゃなくって…………！」

未来の間違いを言つた後に正吾は別の事に気付いた。昨日の夜に起きた幻のような、しかし疑いようのない出来事。放火魔だと自ら認めた少年と、可笑しなことを言つた運乃といつう少女に遭遇したことを見い出した。

それを知らず未来は答える。

「私はあんたを起こしに行けつて逸見に言われたから来たの」

「そうじゃなくってあいつは！？」

「あいつって誰？」

「運乃とか言う奴と放火の犯人だよ！」

正吾の言つた言葉に未来は訝しげな表情を見せた。

「犯人、見つけたの……」

真剣な眼差しを向ける少女に正吾は頷いた。再び家に火を放とうとした少年の姿も、ナイフを突きつけられた時のことと鮮明に思い出す。妙な違和感と恐怖も一緒に蘇る。

「あ、ああ。あいつと、」

あつたことを喋ろうとした正吾に未来は無表情で呟いた。

「そう、よかつたじゃない。犯人が見つかって。で、どうするの？」

少女の聞いている意味が解らず正吾は聞き返す。

「どうするつて？」

「警察に連絡するんでしょう。それとも自分で捕まえるつもり？」

「…………」

自分で捕まえる。初めはそう思っていたのだ。しかし、昨日の状況でその思いは一気に砕けていた。少年はナイフを持ち歩いている。そんな少年を捕まえられかどかなど分からぬ上に、殺すことを厭わない少年だ。危険を冒してまで向かつて行けるような相手じゃない。しかも、自分の手で捕まえてどうするかも分からぬ。警察に突き出して満足するかと言われたら……複雑な思いに正吾は答えるのを躊躇つた。

黙り込んだ正吾に未来はしつかりとした口調で言った。

「私は出かける。そいつに興味があるから」「う

「！ 待てよ。あいつナイフ持つてるんだぞ」「だから何？」

真顔で聞き返してきた少女に正吾は目を見開いた。

「何つてお前」

「ここまで殺人に放火その上傷害だつたら、終身刑か死刑でしょ？
出来れない」

「犯人中学生なんだよ」

残念とも言つかのように未来の表情が暗くなる。

「そう……じゃあ尚更捕まえるべきじゃない。そいつ見たんだつたら特徴教えて」

「何する気だよ」

「捕まえるの。そいつ」

言い切った少女に正吾は衝撃を受けた。ナイフを持っていて、連続放火魔の凶悪犯の少年を、なぜそこまでして少女が捕まえたがっているのか解らなかつた。

俺も捕まえたい、という気持ちはあるのだ。しかし、昨日のような状況にまた遭うと思うと正吾は頷くことができなかつた。

「なんでそんな危ないことするんだよ」

「ここにいる皆が安心できるようにしたいから、ただそれだけ。それでそいつの特徴は？」「何しでかすかわかんない奴なんだぞ？」

聞いた正吾に未来は顔をしかめた。

「ナイフ向けられただけで死ぬわけ？ 銃じゃないんでしょ。そいつが殺すって言つたら、逆にそのナイフ向けて殺すって言つてやるわ。他人殺しといて自分の命を取られるのが怖いなんて、ただの腑抜けじやない」

気丈にふるまつてしているのではなく、これが少女の普通なんだと正吾は知らされた。怖がっている様子は口からも表情にも現れていな。それどころか対抗心の方が強く出でている。家族を殺された自分よりも恨んでいるかのようだ。

頃垂れるような姿勢で固まつた少年に未来は鼻息を漏らした。

「特徴言つてくれないなら自分で探す。あんたは警察に通報だけしどこで。それと逸見とか他の職員には秘密にしどこでね」

反応を示さない少年を置いて未来はドアの方へと向かつた。何があつたかは知らないが協力的ではない。しかし、それも仕方ないかと未来は思つた。

家族を失つていきなり施設に送られた。そのうえ心だつて癒えてもいなはずなのに対面した犯人を捜す手伝い。普通だつたらしない。そう思いながら部屋を出ようとした未来を声が止めた。

「俺も行く」

未来が振り返ると、俯いて拳を作つている正吾がいた。

「あいつには理由聞き損ねたし、運乃つてやつも探ししたい。何よりあいつに、あいつを……」

そう言いながらベッドから降りた正吾に未来は笑みを作つた。

「じゃあ早く着替えて。玄関で待つてるから」「わかった」

頷き活き活きとした顔をした正吾は、未来はやつから一番に思つていた疑問を投げた。

「後でいいんだけど、運乃つて誰？ 友達？」

ひばり児童養護施設の札が出されている門。後ろにある建物と同じで少しばかり塗装や汚れも目立つていて。歳月を重ねてきた証拠だ。

そんな飾り気のない門の前で、正吾と未来の二人が話し合いをしていた。話しの内容はたったの一つ。連續放火魔の少年についてだ。昨日の夜正吾が七五三なごみという男に言われ、町を探索した結果遭つてしまつた少年。その特徴などを正吾は未来に話した。放火魔の犯人である少年は中学生ぐらいで正吾よりも背が低い。百六十センチより上で、六十五よりも下だ。眼つきは鋭く痩せ型。その他正吾が覚えている限りのことを話した所だった。

「わかつた。それじゃ見つけたら電話するから」

「ああ。ただナイフ持つてるから、」

心配する正吾に未来は手を前に出した。

「私よりもあなたの方が心配……。まあどうするにしても見つけたら必ず連絡ね」

了解を示して正吾は首を振る。そんな正吾に未来は一つ付け加えた。外に出る前から言おうと思つていていたことだ。

「分かつてると思つけど、見つけて捕まえるのが前提だからね」

分かつてると答えた正吾に念を押すように未来は強い眼差しを向けた。そしてそれが合図だとでもいうかのように話して決めた通り

別々の方向へと別れる。

未来は住宅街を抜けて町の北側にある駅や商店街へ。正吾は家々が連なる東の方へとそれぞれ向かっていく。手がかりだけを手にして当てもなく。

信号が青から赤に変わる。縦横両側とも一車線の公道に足を止められ、息を整えた未来は左右を見て内心で舌打ちをした。

未来の目の前を何かのパレードみたいに途切れることがなく車が通つていく。車が多いのだ。日曜日であり駅から続いてる道で他の町へも続いている。そしてビル街というのがその理由だった。休日にになると人も車も増えるのが棚橋市たなばしの特徴なのだ。

市の特徴を今だけは恨みつつ、未来は流される水のように走つていく車と信号を交互に見る。

あと少しだ。あともう少しで近づけた。火事で家族を失った少年の言葉通りで、自分の“勘”に当たる少年にもう少しで近づけるのだ。横断歩道の向こう側に少年がいるのだから。

人込みの中にいる少年へと焦点を合わせつつ、息を整えて走る準備をする。ブーツで来なくて正解だと未来は改めて思つた。ブーツだつたらあと一歩で少年に追いつくまではならなかつたはずだからだ。

見えない少年を見据える未来の前をパートカーが通り過ぎる。

少年が向こう側にいながらその後ろを通り過ぎている。やっぱり

役に立たない。

別方向の信号が赤に変わり、目の前の信号が青に変わったその瞬間、未来は周りにいた誰よりも早く駆けだした。対面から渡つてくる人々の間を、器用に駆け抜け少年を追う。

誰も待つていなバスト停を過ぎる。周りを気にせず未来は声をあげた。

「待つて！」

周りにいた人々が怪しい眼で未来を見る。未来が追う例の少年も振り返つた。未来が少年の顔見たのもほんの僅か、少年が急に走り始めた。自分よりも足の速い少年を未来は追つ。

逃がす気など未来にはなかつた。未来がジャケットのポケットからケータイを取り出した。自分のケータイがないため、施設の逸見から無断で借りてきた物だ。正確に言えば盗つたに近い。

拝借した逸見のケータイを操作しながら少年の姿を追つて左に曲がる。棚橋市一宮野の五丁目。ビル街に変わりはない。

打ち込んだ電話番号を見て相手を呼び出す。少年は未来を見ながら徐々に距離を放してくる。未来が思ったよりも速かつた。呼び出し音の長さに未来は顔を顰めた。肝心な時こそ全てが遅く感じる。

「俺だけど」

少年、和井正吾の声。繋がつた途端に未来は唾を飲み込んだ。真冬の乾燥した中で猛ダツシユ。やたらと口の中が渇いて仕方がなかつた。

荒い息で少年に言つ。

「今追つてんの」

「いたのか！？」

「いた。けど、逃げたから追つてる。今五丁目

「一富野か？」

「うん。このまま行くともしかしたら廃墟に入るかもしれない」

「じゃあ、そっちに向かえばいいのか？」

「ちょっと待つて」

未来がケータイを耳から外した。少年があるビルの谷間に入つていくのだ。未来が追いかけて、少年が入つていったビルとビルの間を覗いた。

肩幅が通るギリギリを少年が真横になつて通つている。その部分は子供の間では有名な場所だつた。建物自体はできているが中が完成していない廃ビルへ続く裏道だ。子供にとっての秘密基地であり好き勝手し放題な場所へ続く道だ。

小さい子供が瘦せてないと通れないためほとんどの大人はただの隙間としか知らない。未来もジャケットを脱いでどうにか通れるくらい狭い場所だった。

そこを通つていく少年を未来は疑つた。普通通れないのだから。自分が通れるかどうか迷いながら未来はケータイの通話口を口に当てる。

「やっぱり廃ビルに向かつて。橋西口にいるあんたの方が近いから先に着くはず。私も向かうけどたぶん遅れる」

「……わかった」

「気を付けてね」

未来が電話を切り、ビルの間を通るのを諦める。遠回りしても行

ける道があるのだ。

未来は足を動かした。もう一つの裏道へ向かつて。

ビルの中に一陣の風が吹いた。塵や埃が宙へと巻き上げられる。窓ガラスもドアも仕切りすらないビルを、何もないかのように風はただ通り抜けていく。風が去ると、舞い上げられた塵や埃が塵だけの地面に紛れた。

まるで塵や埃が住人のような、外から見ても明らかに誰も住んでいないビルの階段を少年は息のあがる体で上の。町を逃げ回ったせいもあってかぜえぜえと息切れの音が口から漏れる。耳には全速力で同じように走つてくる音が聞こえていた。

その足音で分かる。自分を追つてくる少女の足音だ。忙しい時に自分を追つてきた迷惑な奴だと、少年は下にいるであろう少女を恨んだ。

警察が家に来ていて帰れない。町にはやたらと警察が出回つている。そんな状況でどうしようかと考えながら町を歩いていたら、いきなり追いかけてきたのだ。しかもかなりしつこい。恐らくは警察の関係者か火事の生き残りのはずだった。でなければ追つてくる理由がなかつた。

少女をどうするか悩んでいるうちに少年はいつのまにか屋上へと上つていた。屋上に出たら逃げ場がない。引き返そうと思い足を止めて少年は躊躇つた。後ろから少女が追つてくる足音が聞こえてくる。

“うかる、うかる、うかる。

慌てる少年の頭に簡単な対処が浮かんだ。屋上のドアを開けて待ち伏せる。そしてドアに隠れて持っているナイフで刺す。ドアに隠れれば返り血を浴びることもないし、不意打ちもできる。

ニヤリと笑つた少年はドアを開けた。青空に眩しいくらいに太陽が光っている。そして屋上には誰もいない、と思つたところで少年は愕然とした。

屋上を囲う胸ほどの高さの汚れた手すり。町の中心から外れた場所につくられて、この辺りでは高くて町を眺めることもできるこの場所。今日はまだ誰もいないはずだった。それなのにも関わらず、なぜか手すりに腰を掛けて背中を向けて座つている少女がいる。誰かわからない。真冬のこの寒さで半袖半ズボン姿の少女がそこにいた。

暑がりの少年でさえ薄いジャケット風のものを着ているのに、色白な腕と足を見せている寒いくらいに薄着の少女がいた。

パニックになる少年が足音を聞いて、少女に声を出した。追われているのだ。少女が誰でここにいる理由はどうでもよかつた。

「お前、なんでこらんだよ。とつとと出てけ。出てがないと、殺すぞ」

少年の叫びに少女は振り返つた。少年はドキリとした。

ふつくらとした細みのある丸い顔。優しそうに笑うくじつとした目。肩にかかるほどの艶やかで綺麗な黒髪。美をつけてもいいくらいの少女が少年の方へと振り返つたのだ。

少年の方を向いた少女が頬を上げた。

「終わった、とでも思った？　あなたはまだ生きしとしてあげる

「生かすってなんだよ

「まだ“生きていい”ってこと。私これから用があるから邪魔しないで」

「お前こそ俺の邪魔、」

その瞬間少年が屋上から消え去った。音もなく、何も残さず空気のように消え去った。

ただ、少女が手に持ったノートだけが揺れた。揺蕩う髪のように静かに揺れた。

正吾は階段の踊り場で一瞬だけ止まった。手を膝に着けてバクバク鳴る鼓動に合わせて息を吐く。

施設で顔見知りになつた少女未来からの電話を受け、自分の家族を奪つた放火魔を追つて入つた廃墟ビル。誰も住んでいない上に工事も手つかずで子供の遊び場になつているビルだ。十五階まであるこの建物を止まらずに駆け上り続けたが、さすがにもう息が続かなかつた。

十五階の踊り場。階段を上り行きつゝのは屋上だけだった。

正吾は階段の先を見た。行き止まりになつている場所、屋上への扉が開いている。

少年が開けた。そこにいる。

一息吐いて正吾は最後の階段を上つて屋上へ出た。屋上へ出た途

端、正吾は風に攫われる粉塵のような、火を点けた所に水を掛けられたような、虚無感に襲われた。

少年がいない。追いかけていた少年は屋上にはいなかつた。

その代りに少女がいた。未来ではない。しかし、見覚えのある少女が手すりに座っていた。今にも落ちそうな格好で腰掛けっていた。

少女が正吾へと振り向く。

瞬間、正吾はそれが誰かわかつた。昨日の夜、忘れる事もできぬ衝撃を受けた少女、運乃だった。

運乃是体全体を正吾の方へ向けるも手すりに座り続ける。そして、状況に混乱している正吾に向けて言つた。

「遅かつたじやない。あと一分ぐらい早かつたら犯人と会えたのに」

喜んでいるかのような笑みを少女は浮かべた。

「今日はタイミング悪いんだね。もっと早く走ってくればよかつたのに。肝心な所で犯人に逃げられるなんて、刑事や探偵には向いてない。追いかけるだけの心意気は認めるけど」

追いかけていた少年がいないのに、いなかつたはずの少女がいる。首を振る少女に正吾は分からず聞いた。

「お前一体何なんだ」

「運乃」

少女が怪しげに笑う。この状況を面白がっているかのような答え方と笑い方だ。

ふざけてる。少女の表情や口調に苛立ち、正吾はそれを声に出した。

「名前は聞いた。お前は」

「世界の運命」

そう言つた運乃の後ろに高さ一メートルはありそうな本が静かに現れた。

突如現れた本に正吾は息を飲んだ。明らかに重そうな分厚い本。開けば少女を簡単に覆うほどの巨大な本が浮いているのだ。少女の後ろで。

驚く正吾を見ながら運乃はそれを口にした。

「モイライ。運命を決めて操る力。それが私の“天性”の力」

少女が笑つた。

9話・運命との対話

正吾は驚きを顔に表した。少女の言つた言葉が解らなかつた。
運命を決めて操る天性の力。
それをどう解釈してよいのかわからない。それが正吾の口から出た。

「運命を、決める」

「そう。あらゆる運命を監視して必要であれば操る。そして全ての運命を操る。それが私の“天性”」

少女の話すこと全てが正吾を困惑させる。

「何言つてんだ？」

「言つてみればあなたの運命を私が決めて、その上をなぞるようにならう。あなたが歩く。そして万が一その道を反れると私があなたに関わる全ての運命もろとも修正する。たゞに完全に道をそれればあなたを消す。いなかつたことにして」

道を歩いて反れる。そして消える。いなかつたことにして。ますます意味が解らず正吾は突つ立つたままになる。道が人生でその上をなぞるように歩く。つまり運命にしばられて。その運命を少女が決めている。

「何馬鹿みたいな事言つてんだ」

信じられず、しかし正吾は立ちつくす。運命を操ることなんて人間にはできない。少女の妄言としか正吾には思えなかつた。動かない正吾に運乃は笑顔を向ける。

「北極の氷でも持つて来てあげようか？」

正吾は唖然とした。少女は無理なことを言っている。北極の氷を持つてくるなど運命よりも信じられない事だった。今から北極へ行くと言つて行けるような場所でないことは考えなくとも分かる。行くだけでも無理な場所なのに、そこから氷を持つてくるなどできるはずがなかった。

正吾のことなど氣にもせず運乃是続ける。

「大きいのは無理でも小さいのぐらいだつたら簡単だから」「行けるわけないだろ。それに何言つてるかわからんねえよ」

運乃が手にノートを持つて左手のペンで何かを書いた。

「ここから北に行けば着くじゃない。信じられないなら今から行って戻つてくるから待つてて」

正吾が馬鹿馬鹿しいと声を掛けようとした。しかし、それを遅いとでも言うかのように運乃の姿は消えていた。音もなく粒子のように消えるわけでもなく、手品のようにパツと消えていた。ただ、少女の後ろに浮かんでいた本だけを残して。威圧感が漂う本を正吾はしばらく見つめる。古びた蒼い表紙には英語で何書かれているだけで、飾りつ気はこれっぽっちもない。見た目は大きな鉄の扉みたかった。

正吾が鉄扉のような本に違和感を覚えた時だった。

少女がどこからともなく現れ、正吾に向かつて何かを投げた。軽やかに飛ぶそれが太陽の光で輝く。それを正吾は手に取った。

「つめてつ

「当たり前でしょ。今とつてきた氷なんだから」

正吾の足元に両手ほどのテコボコに角張った氷が転がった。コンクリートの上で煌めく氷の塊に正吾は目を丸くした。

あまり雪の降らないこの町では最近でも雪が降っていない。氷は売っているが、転がったものは売られているものとは違っていた。厚みがまして自然に濁つたような氷の塊。冷たさも冷蔵したものとは遙かに違い冷たかった。

正吾の体を蛇が這うよつた氣味の悪い寒気が襲う。突然消えて再び現れた少女。氷の塊。巨大な本に、少女が書いたノートと使ったペン。そして正吾の目の前にいる少女自身が近づくことすら躊躇う恐怖に見えた。少女の腕に薄らと白い雪のよつた氷の粒が乗つているのだ。

動搖している正吾に運乃は言った。

「今私はここにいなかつた。北極へちょっととした探検に行つてね。そのお土産を持って帰つてきた。そういう『運命』だつた

運乃がふふっと笑う。正吾は頭で考えられるだけ考えた。少女の言った意味を。

少女は北極へ探検になど行つてない。少女は今ここにいて、確かに姿を消して現れたのだ。その空いた間が少女の言つ探検の時間。摩訶不思議な魔法みたいなものだと考えた。

その上で正吾は少女に聞いた。

「運命運命つて何なんだよ」

「言つたでしょ。私は運乃。運命だつて」

「だから運命つてなんだよ」

声を荒げる正吾。運乃是手すりによりかかった。

「人生においての境遇や成り行き。元は天からの命によつて決められたもので、」

「そんなこと聞いてんじゃない。お前の言つてる運命つて何なんだよ」

「私が持つてる“天性”よ」

「なんだよ“天性”つて」

「正吾に言つても解らないでしょ。簡単に言えば、私は正吾と少年の運命を動かした。少年はここにいたんじゃなくて、正吾が勘違いしてここに追いかけてきた。少年がいるんだと思って。そして少年はここに来たんじゃなくて途中で正吾を巻いて、「

「違う！」

正吾が怒鳴る。運乃の言つてることとは全く違つていた。
険しい顔を向ける正吾に運乃是聞き返す。

「違うなら少年がいない理由を正吾は説明できる？」
「できない。けど、でも違うだろ」

「その根拠がない。だって、正吾は少年に会えてないんだから。本当にここにいた？」

「いただろ。お前が、魔法かなんかで消すまで」

「いたけどいい。それって不思議ね。そんな不思議なことがあるなんて、私は信じられない。魔法が使えないもの。それとも、正吾は私が魔法を使えることまで証明できる？」

「お前……」

おちやらけていて話にケリがつかない。正吾は拳を固めて、少女に鋭い目を向けた。

混乱して怒っている。運乃が笑いを堪えて真面目くさった顔で、その怒りの矛先をかわす。

「それより南部未来の所に向かつたら。心配じやないの。ナイフを持った少年を追いかける女の子のこと」

「…」

正吾が思い出して気付いた瞬間、手すり際に移動していた。屋上の入り口から屋上の端に一瞬で移動していたのだ。そして目の前には運乃という少女が怪しげに微笑む。

自分の移動を理解できない正吾に、突然運乃は掌を向けた。続けて正吾の胸に手を置く。

「助けるよつもまづ、正吾が死んじゃうかな。屋上から落ちて」

「一コリと笑い運乃が正吾を押した。押された正吾は手すりに足をひっかけてバランスを崩す。落とすつもりで押している。そう正吾が気付いた時には支えのない空中へと体を放り出された。

「ああああああああああああああ

落ちる正吾を見て運乃は変わらず微笑を向ける。落ちていく正吾を見ながら今押した手で小さなノートに何かを書いた。

正吾が空中でぐるりと半回転する。うつ伏せの状態で落ちていく。物凄い勢いで地面が正吾に迫る。いや、正吾が地面に迫つていく。瞬く間に近づいた地面に正吾は目をつむった。

正吾の体が地面にバフッとぶつかつた。変な感覚に正吾が目を開けると、分厚くて柔らかいクッションが顔を塞ぎ、落下の衝撃を和らげていた。

十五階から落ちたのに生きている。それに正吾は慌てて上を向いた。落ちて助かる高さではない。まして、建物の周りにはクッションなど置いてない。できすぎてる状況に、屋上で変わらずに自分を

見下ろす少女をにらんだ。

何かした。正吾が少女を睨んだ瞬間、後ろで声がした。

「よかつたじゃない助かつて。正吾って運がいいのね。火事でも助かつて、屋上からも落ちても生きてる。けど、その運ももしかしたら今日で尽くるかもしれないよ。運命の女神つて、簡単に人を見放すことが多いから」

運乃の声に正吾が振り向いたのも束の間、今度は上から声がした。
陽気な声で。

「じゃあね。早く降りれたんだから早く行つたほうがいいよ。アレが近くにいるみたいだし。それと、もう一度と会わない事を祈つてる。バイバイ」

少女が正吾の視界から消えた。屋上の中心へと歩いて。

見えなくなつた少女から目線を外し正吾は立ち上がつた。放火魔の少年、そしてその近くにいる少女の所へ向かうことを決めて走り出す。

10話・放火魔の結末

未来は足が震えるのを感じた。ただの武者震い。怖いのとは違う。
未来はそう自分に言い聞かせる。

未来の前ではナイフを持った少年が立っていた。丸腰の未来に比べ、少年はナイフを持っている。有利なのは少年なのにも関わらず、どこか震えていて、互いが互いに怖がっているような雰囲気だつた。未来はやつと追いついた少年にもう逃さないと決めていた。追いかけて見失い、また見つけて路地を抜けたビル街の空き地に追い込んだのだ。周りは建物だけで未来の後ろだけが表の道路に続いている。少しばかり悪臭も漂つている場所だ。しかし、それも二人には関係なかった。逃げられる逃げられないじゃなく、生きるか死ぬかが掛かっているのだ。

未来は少年に向かつて聞いた。声が震えないよう口調を強めて。
「あんたは、なんで放火なんてしたの」「男に言われたからだ」

未来が聞き返す。

少年はナイフを握り絞めて答えた。

「知らない奴だけど、男が俺に力があるって言ったからやつてみた。そしたら火が放てたんだよ。火走りっていう天性だつて」

未来は眉を顰めた。

聞きなれない言葉、天性。何のことを言つているのか想像もつかない上に、火走りというのも分からぬ。しかも、少年はそれを男から聞いたと言つた。未来は少年の妄想か何かかと疑つた。

「天性、何それ。あなたの妄想?」

「違う。でも、俺も知らなねえよ。知らない男から言われんだからよ。けど、試してみたら火が放てて、それで面白いなと思つてやつただけだ」

「面白い?」

未来の顔が険しさを増す。

「そうだよ。自分の思つた通りに家が」「ふざけないで! 家が燃えて面白い? 何馬鹿なこと言つてんのあんた。あんたのせいでどれだけの人間が死んだと思つてんの!」

踏み出した未来に、少年が近づくなと叫ぶ。踏み出した足をそのままに、少年よりも恐ろしい眼で未来は前を睨んだ。どうあっても許せない気持ちで。

凄みを利かせる未来に少年はビクリと後ずさる。まるで田が殺すと言つていて、動くなとでもいうように少女が近づいてくるのだ。未来と少年の距離が縮まるごとに、少年はナイフを前に突き出すような姿勢を取つた。

「来るなつて。殺すぞ」

「殺せるなら殺せば。今までもそうしてきたんでしょ。それとも、抵抗されるとできないわけ、腑抜けだから」

未来が近づくのも止めず強い口調で言い放つた。未来は余裕があるわけでも、勝てると思っているわけでもない。どうしても許せない気持ちが未来をそうさせていた。

「メートルあるかないかまで未来が少年に近づいた。おかしな少女に少年は刃先を向ける。いつのまにか少年の方が震えていた。

「死にたいのかお前」

「死にたいなんて思うわけないでしょ」

出されたナイフに未来がようやく止まる。飛び掛かられたら死ぬ距離。そこまで近づいていたのだ。

未来は少年を殺すような眼で睨み、少年は未来をやつとの気持ちで見る。一方は恐怖し、もう一方は恐れる気持ちがどこかへ消えていた。

息詰まるような緊迫感を少年が変えた。少年が前へと足を踏み出して、未来にナイフを突き出したのだ。突進する少年に未来が一步退く。少年の持つナイフが未来の左胸を目指して突き進む。二人の動きが止まつた。

「え、なんで。おい」

少年が体を揺する。腕が挟まれたのだ。少年の腕は未来の左脇の下で腕に挟まれていた。少年が突き刺したはずのナイフは、未来の体の横を抜けていたのだ。

少年が慌てる。止められるとは思つていなかつたからだ。
未来が少年の腕をつかんだ。

「うつ」

少年が未来の横でひっくり返った、いや、ひっくり返された。未来は少年に足をひっかけて、雑に投げ飛ばしていた。ナイフが少年の横で金属音を立てて転がる。

未来が少年の腕を放して、ナイフを靴で蹴つた。

「あんた、絶対に逃がさないから」

少年に叱り飛ばす勢いで言うと、未来はケータイを取り出した。

少年は未来の足元でうずくまっている。情けないと未来は思った。

「110番にかけ一部始終伝える。犯人のこと、住所等を一しきり喋る。そうして足元に冷たい視線を送る。

「もう少ししたら来るから。あなたのこと探してる町中の警察が「未来が終わつたことに安堵した。

一息吐いたその瞬間、

「うあああっ」

「…」

突然少年が未来の服を掴み地面に押し倒した。抵抗する未来に跨つて、少年は未来の首を両手で掴む。その手に血管がくつきりと浮かぶほど力を入れる。

「お前のせいで捕まるんだ。お前死ねよ。死ね。死ね」

「うつ」

喉が潰れそうになる。喉がつつかえて息ができない。未来が自分の首を掴む少年の両手に爪を立てた。

抵抗して爪を立てる未来に、少年の首を握る力が増す。それに合わせて未来は精一杯爪を立てる。首を動かし、爪を立てても少年の腕は解けない。それどころか意識が遠のく感覚だけがどんどんと押し寄せる。

少年が体重をかけて首を押した。

「痛いんだよ、死ねって言つてんだろ」

「お前、何してんだつ！」

大声に少年が顔を上げた。途端に後ろへと突き飛ばされる。

「大丈夫か？」

起き上がる未来に手を伸ばして声を掛けたのは正吾だった。

咳込む未来が首を絞めた少年を睨んだ。殺意の籠った目で少年を見つめる。

正吾が未来を助け起こすとその前に立つた。前に立つた正吾に未来は今さつきのことと言つ。

「警察が向かつてゐるけど、どれくらいこで来るか分からぬ」

少女の言葉で正吾は悟つた。警察が来るまで足止めしてゐる。だから、少女はここにいるのだ。殺人犯を目の前にして。

正吾が前を見つつ未来に言つた。それが最善の策だと思つて。

「お前警察呼んで来いよ。そつすりやこいつ

「まだ聞いてないから」

正吾の言葉を未来が遮つた。

未来は喉を押さえながら、正吾の向いに見える少年に目をやつした。

「何を聞くんだよ」

「男つて誰。誰からわつきの話聞いたの」

「名前なんか知るかよ」

少年がポケットに手を伸ばす。中からナイフが出てきた。

「一本も」

「お前先逃げる」

「あんたは退いて」

驚く一人の方に少年が走り出した。ナイフを手にして。

正吾が未来を後ろに少年の前に立ちふさがる。退けばもう一度投げ飛ばせると考える未来とは裏腹に。

ナイフを突き出す少年。死を覚悟して立ちふさがる正吾。前に立つ正吾を邪魔だと思う未来。三人がそれぞれ覚悟した時だった。少年が目を見開いた。ナイフが正吾に届く。

「え」

「あんたなんで」

正吾でも未来でもない手が少年の腕をつかんだ。「じつじつとした手が、少年の腕をガツシリと掴む。正吾の心臓の前でナイフが止まつた。

「二人とも逃げる。足止めだつたら俺がするから」

無精髭を生やした黒いコート姿の男が叫んだ。

「行け！」

未来が正吾の腕をひっぱり、一人が路地を駆け抜けていく。正吾が振り返るのを未来は制した。未来が現れた男、七五三に疑問を持ちつつ正吾を導く。一人が路地裏から消えた。

少年が痛みを堪える。男は握りつぶしそうなぐらいの力で腕をつかんでいるのだ。

「離せっ」

「つるさいぞ。ガキ」

七五三が少年を突き飛ばす。少年が仰向けに倒れた。転がったナ

イフを掴もうとした少年の腕を七五三が踏む。力を込めて。

うめき声をあげる少年を見下ろしながら、七五三がしゃがんだ。

「人を殺せるなんて、良い立場だな。なあ里崎」^{りさき}

七五三が顔を上げるとビルの窓から一人の男が顔を出した。サングラスがよく似合う男だ。

男が窓枠に両手を組んで一人を見る。

「嫌味か七五三。そもそもあの未来ってガキと正吾つてガキがベタベタくつつくからだ。まいったぜ。撃ち損ねた、そのガキ」

男が笑いながら少年に黒い銃を向けた。七五三が鋭い眼を男に送る。冗談だと笑いながら、男が少年から銃口を外す。

男が七五三の行動に眉を顰めた。七五三が少年の腕を踏みながら首にまで手を掛けている。握りつぶすつもりはないはずだった。絞殺だと困る理由があるのだ、七五三には。

七五三が暴れる少年を一度殴り、男の方を向いた。

「薬は？」

「あるけど、高くつくぞ。なんせ、俺が殺し損ねたんだからよ」

「金なら後で貰え」

「いいのか、お前から」

「バーカ、俺がお前に渡してどうする。儲けにならないだろ」

男が笑いながら小さな袋を七五三に投げた。それもそうだと納得する。

七五三が袋を受け取り、中身を出した。“ただ”の飲み薬だ。手袋をはめている手でしっかりと中身を確認して開けた。

「失敗するなよ」

「すると思うか。俺が」

男がそれを確認すると、両手を窓枠から離した。

「じゃあな、ガキ。来世でお互い真面目な人間として会おうぜ。ははははは」

高笑いしながら男がビルの窓から離れて行った。それを見届けて七五三は少年に目線を合わせる。抵抗する少年の首から手を放す。首に手の跡が着いていないことを確かめる。

そして息を吸つてむせこむ少年に、手に持った薬と水を飲ませた。ついでに少年に薬の入った袋を触らせる。そうして男がいたビルの中に袋を詰めたペットボトルを投げ込む。証拠品全てを男が回収する場所だ。

「心配するな。すぐには死はないからよ。だが、もって一時間が限度だな。警察署着いて、手続きして話聞いてる間に死ねる。お前が話すことは何もねえから、安心しろ」

そう言つた後に七五三は周囲を見た。誰もいない荒れている裏路地。証拠合せには丁度いいところだった。

ニヤリと笑つた七五三に少年がはむかつ。

「ふ、ふざけるな。お前がやつたこと喋つてやる。全部」「いいぞ。話して」

七五三が余裕のある口調で言つた。計算で分が悪いのは少年の方だとわかっているからだ。

「ただ、これだけ殺人を犯した少年をどこまで信用してくれるかなあ。警察は」

途端に七五三が少年の胸倉を掴んだ。胸倉をつかみ顔を近づけた七五三に少年は口を閉じた。目を合わせるのも躊躇つほどの怖い顔で七五三が言った。

「これがお前の最期だ。足掻けよ、殺した奴らの人生分」

少年から手を放し七五三が手袋などを外す。用はなかつた、少年にも手袋にも。

二人の耳にサイレンの音が聞こえた。

七五三がコートの裏側に手袋を仕舞つと、少年にもう一度顔を向けた。

「それと、暴れるだけ暴れる。その分死ぬ時間が短くなる」

パトカーの音が後ろで聞こえたのを七五三が確かめて、走つてきた警官と刑事を向いた。

若年の刑事が言つ。

「七五三さんいました。少年も一緒にです」

刑事と警官たちが敬礼する。新品と一目で分かる黒のコートを着ている刑事に七五三が申し訳なさそうに言つた。

「悪い。署を慌てて出たもんだから、手錠忘れたんだ。頼むよ」

刑事がポケットから手錠を出しながら笑う。

「はいはい。了解ですよ」
「おいおい、そんな言い方じゃ俺がいつも忘れる間抜けみたいじゃ
ないか」

「そりでしょ」

刑事が苦笑いしながら少年に近づく。近づいた刑事に少年は七五
三を指差した。

「おい、こいつ俺に」

「動くな。話しだつたら全部署で聞いてやるから」

七五三と刑事の二人で少年に錠を掛けた。暴れると七五三は思つ
た。

立たされる少年が刑事に向つた。

「警察に着いたら俺は死なんだよ」

「何言つてんだ。警察署ついてお前が死ぬかなんてまだわかんない
よ。全部決めるのは裁判所だ裁判所」

パトカーへと少年が押し込まれる。周囲には騒ぎを聞き付けた野
次馬が集まつてゐる。

「死ぬんだつてこの男に」

「殴られて頭がおかしくなつたんだなお前。七五三さんだけ殴
つたんですか？ 下手したら」

「正当防衛だ。全部」

「はいはい。いい言葉ですよね。正当防衛」

「お前もムカついたやつがいたらそれで済ませ！」

「ええ、参考にしちゃりますよ」

少年の隣に乗り込んだ七五三に刑事は苦笑する。

少年が再び暴れる。隣にいる七五三という男に向かって。

「俺は死なんだって、ぐつ」

「お前黙つてろ」

刑事と七五三に抑え付けられた少年が離せと願う。
それを知つていて七五三は抑えつける。

サイレンの音が響いた。一台の車が事件現場を離れていく。

その日パトカーで運ばれた少年が、警察署で真実を話す事はなかった。

キッチンと居間の一室を一つにした施設の居間。食堂に当たる場所だ。その真ん中にはテーブル一つを合わせた、大きなテーブルが置かれている。元キッチン側の部屋は変わらずシンクやコンロ、冷蔵庫も置かれている。そして居間側の奥にはテレビが置かれている。32インチの地デジ対応のテレビだ。

そのテレビ画面を未来は険しい表情で見つめた。

「速報です。棚橋市を中心に火事を起こしていた少年が、警察署内の取り調べ中に死亡したとの報道です。えー速報です」

「死んだ?」

「生きてたる。あいつ、なんで」

未来が隣を横目で見て、居間の冷蔵庫に手を伸ばした。乾いた室内に、走ってきたせいで喉が渴いていた。季節ではないけど麦茶が入っている。それを取り出してコップに一つ注ぎながら、未来は言った。

「何か飲んだのかも。毒物には詳しくないけど、青酸系の何かとかよくあるでしょ。私たちに追い詰められてあの状況だったから、捕まるのが怖くてそうしたんじゃない。にしても、ハ方塞がりで考えたのが死ぬことだったなんて、ホント、ふざけてる……！」

気付いて未来は後ろを向いた。

テレビ画面から聞こえてくる放火魔についての報道を見ながら、少年は体を震わせていたのだ。何も言わず、動こうともせず、テーブルの横に立ち画面を見つめている。何かを訴えるかのようにじっと、子供のように画面だけを見つめていた。

未来が冷蔵庫に麦茶を仕舞い、コップを口に当てて飲み干した。飲み終えたコップを置いて、未来は少年の横を通った。少年は動かない。

未来がその顔を見てテレビ画面、床へと田線をさげた。リモコンを手に取り未来はテレビの電源を切った。

「麦茶置いてあるからよかつたら飲んで待つて。逸見呼んでくるから」

未来がそう言つて居間から出て、廊下を左に曲がった。
少年は死んでいなかつた。確かに生きていたのだ。あの男が来るまでは確かに生きていたのだ。正吾じょうごを刺そうとして。

未来が疑問を持ちながら事務室に向かつて歩き、廊下にいた人物に顔を顰めた。コート姿に無精髪。いい歳をしたオジサンも似つかわしい男が歩いていたのだ。遊び場に向かつて。
七五三なないみが未来と対面する。

「二人とも無事だつたかい
「見ればわかるでしょ」

未来が無愛想に答える。この男がどうしても嫌いなのだ。
田の前に立つて未来が矛盾する疑問を七五三に尋ねる。

「なんあんたあそこに来たの」

「凄い形相で走つていいく、和井君をみたからだよ。それで追いかけたら君たちに向かつて少年がナイフを向けてたから、ピンチかなつと思つてさ」

未来が男の目を見る。にこやかに笑つてゐる田だ。はたから見た

ら悲しいような深刻な目に見えるが、この張りつめた空氣の中で未来には笑っているように見えた。

それを不気味に思う未来に七五三が聞き返す。

「ところで、なんで未来ちゃん達はあそこにいたんだ？」

「遺族が、家族が犯人追っちら悪いの？」

「悪いとは言わないけど、そういえば彼大丈夫かな。家族全員亡くなっちゃったんだろ。ホント可愛そうだよな。犯人も死んじゃってさ。彼大丈夫だつたかい」

途端に未来の手が七五三のネクタイを掴んだ。

「言葉を謹んで！ それ以上何か言つたら私があんたを……」

怒鳴り声に未来の気迫が込められる。七五三のネクタイを手元に寄せて、鬼すら睨み殺すような目を未来は向けた。その顔に七五三は思わず引いた。

「い、ごめん。不謹慎だった。悪かつたって」

未来が呆れて手を放す。

首元を直す男と未来がすれ違つ。ぽつりと呟いて。

「皆に今のこと言つたら、許さないから。あと彼に近づかないで」

「わかったよ」

怒氣を露わにする未来の背を七五三は見送った。七五三が「い」に来てから今までの間で初めてみる形相だった。

去つていく未来の後姿を七五三は見つめる。ニヤリと険しげな笑みを浮かべて。

『零れゆく運命達へ』

また一人私の知らない所で人が消える。よくあることだ。

だけど、それを悲しいと思うことが私には悲しい。どうして人は死ぬのか。多くの人を見てきたけれど、私には分からない。人が死んでいく理由なんて。あまりにも多すぎるから。

人の死を見たくないのに見ることになる。だけど、そこから目を背けることは許されない。目を背けたら皆が死んでゆく。

だから私は、見なければならない。

せめて、死なないように動かすのだ。
死にゆく運命達を。死なせないようだ。

「詩人のつもりか、運乃？」

りさきよつへい
里崎遙平。

性別は男。

職業、人には言えない事。

趣味、人には言えない事。

私との繋がり、敵対関係。

私がこいつを嫌いな理由。

私を着けまわす変人だから。

「あなたへのレクイエムよ」

変態。

この男との出会いも、運命。

私が触れたくなかつた運命。

1章までの登場人物（前書き）

あらすじのような簡単な登場人物の紹介です。
章ごとに登場人物の詳しいことなどを書いていけたらと思っております。

自分で見ながら、まとめるの下手くそ、と思いました……。
13部と14部が逆になつてしましましたことお詫び申し上げます。

1章までの登場人物。

和井正吾
かずいしょうご

主人公の少年。高校一年生。

中学生の少年によつて家族を火事で亡くす。その後、南部未来のいるひばり児童養護施設に引き取られる。そこで出会つた七五三の情報を基に少年を探し、運命操るという謎の少女運乃に会い、特異な能力を目の当たりにする。直後、殺人と放火の少年を見つけるが七五三が割つて入り、未来と共に逃げた。その日の速報で少年が死んだことを知る。

南部未来
なんべみらい

ヒロインの少女。高校一年生。

ひばり児童養護施設に実質住んでいる美少女。下の子の面倒見はいいらしいが、逸見以外の職員に対しては無愛想。ちよくちよく来る七五三のことは近寄るのも嫌なほどに嫌つてゐる。施設に引き取られた正吾と会い放火魔の少年を探すことになるが、ニュースで自殺した事実を知る。

運乃
うんの

ヒロインの少女。天性という名の運命操る力がある。正吾と一度会つてゐるが、全く謎。自身の力を天性、モイライと語つてゐる。基本正吾のことを「あなた」か「正吾」と呼ぶ。常にペンとノートを携帶。

『ひばり児童養護施設』

眞井優奈
まないゆな

施設にいる中学一年生の女の子。未来の次に年長。未来の自由奔放な性格を力バーするかのようなポジション。めんどくさがりの未来に、頼りにされている。

ユウくん

施設にいる七歳の男の子。

マキちゃん

施設にいる七歳の女の子。

逸見百合香
へみゆりか

施設長の女性。40代で皆からは逸見さんや逸見おばけやんと言われている。未来とは長い知り合い。

『第三者』
七五三
なじみ

30代ぐらいのスースを着ている男。無精髭が生えていて、正吾から見てオッサンという言葉が似合っている。一般企業に勤めていながら刑事の仕事もしていて、拳銃殺しまでしている人物。施設の子供達には好かれているが、未来には嫌われている。

里崎遙平
りさき ようへい

サングラスをかけている。七五三とは知り合いらしく、世間話もする。銃や薬品を携帯している危険人物。運乃をつけまわしているらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3383z/>

運命物語

2012年1月10日20時00分発行